

川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十三年八月二十五日 印刷
昭和四十三年九月一日発行 毎月一日発行
(第三十六号)



No. 36

九月号

明日のために
今日ものむ
ポポンS

シオノギ製薬

仲代達矢



国立公園 奥新和歌浦

・雑賀崎



国際観光旅館

うおまた
魚又楼

TEL 和歌山 (44) 0431・1186代
大阪案内所 (641) 3 5 6 4

誇る
海岸美を
風光明媚な



青玲社グループ日本画展 石仏 中島小石

手を抜いたたてものに似る男なり
身の程を知りすぎ小才が邪魔になり
言い負けてからの口数多いこと
妻だけにたよる宿命の好々爺
座頭市目あきの剣をはがゆがり

中島生々庵

今月のことば

◎いのちがけという言葉がある。大切な命を
そう心易く打ち込んでばかりは居れぬという
考え方もある。しかし一瞬一瞬が命であると
観ずれば一分間に60、一日に8万6千もの命
があることになる。この頃しきりに思うこと
は見られる時に見ておこう、読める間に読ん
でおこう、書ける間に書き残そうという事だ
がある。老化現象だよと友人の医者は言う。が
この心境は日暮れて道遠しの感じとは凡そか
け離れたものである。先月やった精密検査で
は、血圧も心電図もコレステロールも上々。
老眼だけは仕方おまへんなあと主治医も笑っ
て居た。「この老人まだよくくらくらく眠
り」である。

◎最後に安達瞳子さんの言葉を拝借する「生
命の強さ美しさを求めればこそ人は花を生け
アサガオの夜を作るのだ。今朝のムクゲは消
えてもムクゲの美しさは永遠に流れているで
はないか。時の流れの一点である一人の人間
の意味を、ひとときが命である夏の花々は毎
年私にそっとささやいてくれる」

川柳塔九月号

川柳塔九月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……………中島生々庵…(1)

川柳塔…(同人作品)……………中島生々庵選…(4)

外来語……………浜田久米雄…(2)

路郎先生の初心時代……………清水白柳…(24)

川柳初篇研究…(六十三)……………(20)

前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄

川端柳風・故高須亜三味・丸十府・岡田甫

偶感三題……………石原青竜刀…(22)

くさい話と銃床詩…(大陸巷談)……………東野大八…(28)

にんげん……………戸田古方…(44)

豊臣秀吉…(八)……………富士野鞍馬…(42)

私論・柳論

外来語

九月は台風の季節。台風のため
に思い出すのが路郎先生の句。

颱風のあんな力が欲しくなり

まこと人間どもは氣象庁をはじめ
として台風の下で身動きのできな
い何時間かを過ごすのである。

テレビは台風情報をくり返しし
やべってはいるものの嚴重に注意

せよと言うだけで人も木も家も動
物もまるで処置なしである。けれ
ども昨年台風に見舞われずに豊作

であったように、ことし氣象庁の
観測は関東方面から北へかけての

台風が三、四回あるということ
でひとまず安心の態である。

さて、年をとるにつれて川柳と
いう趣味を持ちつづけて来たこと

が今更ながら有難いと思っている
毎日である。川柳に興味を持って

おればこそいろいろの会に出席で
きるし一日一日をたのしく過とし

ているのであるが、この頃すこし
物足りないのはあまりにも多い外

秀句鑑賞……………	後藤梅志……………	(30)
痴盲録……………	高鷺亜鈍……………	(41)
雅号ぶつちゃけばなし……………	尼河村日満……………	(45)
私のメモから……………	吉田水車……………	(43)
近作柳樽……………	若本多久志選……………	(32)
新書紹介……………	橘高薫風……………	(57)
動くテレビに動かぬ証拠……………	不二田一三夫……………	(23)
初步教室……………	菊沢小松園……………	(46)
大萬川柳「剃刀」……………	清水白柳選……………	(50)
★柳界展望……………	(薫風)……………	(52)
★本社八月句会……………	(庸佑)……………	(54)
★各地柳壇……………	(文秋)……………	(58)
一路集「少女」……………	村上旭童選……………	(48)
「皿」……………	菱田満秋選……………	(48)
	青木遊星選……………	(49)
★編集後記……………	(白柳・一三夫)……………	(64)

来語の進出である。生活のなかに
外来語が進出して来たことはいな
めない事実でマスコミはもち論、
包装のボール箱にまで日本語が全
然書いていないのがあるように外
来語の進出はまことに隔世の感が
ある。

われわれが川柳を始めたころは
そうでもなかったのに近頃句会に
行つて、川柳の雑誌を見てあまり
にも多い外来語の片仮名に驚嘆の
あまりついに外来語辞典をかうに
至つた。江戸時代からの古川柳に
は外来語はひい。日本語
ばかりである。川柳古来の
領域が侵されているような句に出
くわすことがよくある。これは致
し方ないことだと思ふ。時世がそ
うさせているので外来語絶対に反
対とは言わないものの、十七文字
の中に英文を入れてる句、英文
を片仮名で長く入れている句——
もち論字余りである——こう言う
句は現代の川柳としても面白くな
い。

(浜田久米雄)



中島生々庵選

大阪市 西森花村

タコ焼き屋もやれずと和尚笑わせる
人間とはあの程度です夫です

引き越しの名残りを屑屋と惜しみけり
マイカーを手放し顔にゆとりが出
お若いとはめれば失業しています

大阪市 正本水客

自分以外のものになりゴーゴーに溶けこむ

芋粥に老の絆を大事がる

石庭とつつじと寺は山を負う

山と山は出会うことなく雨走る

風があり野鳥の声の邪魔をする

青森市 工藤甲吉

明治百年元宮殿下落選し

明治百年の竜馬はヘルメット

もらい物ですと正直に特級酒

ひょっとこ面が一番似合う我である

ヒゲ立てたまんま泥鰌は鍋の中

鳥取市 河村日満

もしわてが死んだらもらいはるやろな

もてさえすれば料理屋で飲むもよし

夫婦だけの日の膳夫婦子を語り

ほめて話せばほめた言葉が返ってき

たびたびだから妻に内緒の寄附となり

高槻市 若柳潮花

縫いあげて着せて宵には帰すひと

泊るとも去ぬとも言わず雨へ向き

迎い傘虹が出ているあほらしさ

蝶二匹かなめ返しのように舞い
盃を思わせぶりの瞳で返し

出雲市 尼 緑之助

人喰ったポスター悠々御当選
鮎料理値段の方も言い添える
本題になって睡む気の飲み疲れ
人工を入れねば来ない観光地
住職もお金に弱いガイドする

名古屋市 吉田水車

路郎先生三回忌

巡り来るお声も近し雲の峯

参院選挙終る

皮算用胸算用も寝てしまい
そのかみの名妓朝日を手放さず
来るとこへ来たというのが夏のミニ
ほしそうなものの値段は裏返えり

岡山県 浜田久米雄

ありったけの媚へ男の無表情
寿の字がたのもしく見えはじめ
年寄りの愚痴は聞こえぬように言い
旅に出る鞆くすりをたしかめる
思うこと以上を酒の酔いが言い

高槻市 傍島静馬

着飾って一オクターブ上げるママ
早起きがいまこたえてきた生欠伸
手不足に二号の子などと云うとれず
むしろくしゃを紛らず術にお念仏
よそよそしくされてパトロン隅で飲み

諫早市 川岡靈眼子

諫早水禍十一回忌

梅雨毎に諫早のきず労られ
川の面に面影しのぶ万灯籠

諫早名橋眼鏡橋

宿業の川を見つめる眼鏡橋
玉串を捧ぐ高さに神があり

原爆忌近まる

きの子雲神を忘れた日を想い

鳥取市 森本法泉水

歌人枝野登代秋氏死去(二句)

父の日に父を葬る人もあり

善行表彰実は無聊でした仕事

東京出張

東京で豆腐を担ぐ人にあい
東京を汽車が離れてホットする

車窓から

保津峽をどう削るのかブルドーザ

豊中市 戸田古方

青いまぶらさがってる実になる実

ハイウェイと知らず燕の田舎もの

サル知恵がまた改良をしはじめる

新製品ここが欠点とはいわず

配色の好みで美人ときめている

大阪市 金井文秋

法律の裏では大の虫が生き

愚痴聞いてもらいおちつき取りもどし

倒産の気配小売屋にも感じ

ピラニヤの餌とは金魚哀れ過ぎ

今までの駄目と新葉まかり出る

ハワイ 羽佐間柳葉

地位と云う未練がさせる低姿勢

無い智恵を絞って渡る世はきびし

金のない時に生憎ビケーション

席蹴って帰る勇気も鈍る齡

特売場女仮面を脱ぎすてる

大阪市 不二田一三夫

神々の呼吸の中で浮き沈み

人間は愛しあうもの陽は一つ

ぬかるみを越えた女の半生史

読みかけの書籍が春から秋を越し

故九里丸師をおもつ

しゃべれないところが魅力の芸の巾

倉敷市 木村千容

ふがないことじゃ

肋骨が折れて余命へ節がつき

まけてたまるかへこたるな

余命またのびて保全の総入歯

盆栽に転んだ科はきせられず

かわってあげたい人がある

身がわりができればなど初一念

大阪府 早川清生

嫁ぐ金ためおり平和信じおり

西夏文字解けばかそけき鼓のひびき

他人一人住んでわが家の香が変わる

半跏思惟弥勒の及ぶ世ではない

倉敷市 本田恵二朗

雑沓でおやまあまあを拾い当て

ままごとの世帯やっぱり不如意らし

六十から人生善用法おぼえ

遺影に見つめられて絶句する

鳥取市 藤本 礎山

邪魔な奴お邪魔ですかと又来て居

弱点をつかれた証拠腹をたて

良識を信じますワとスリ逃げ

名簿から明治がひとり今日も消え

大阪市 西出 一栄

入念に踵をこする老の風呂

町内を牛耳る人のエゴイズム

能書へ病氣の数が多すぎる

と云うて爪を煎じて飲めもせず

大阪市 山川 阿茶

香焚を貰える人が一人減り

朝詣り体操もしてすがすがし

夫婦善哉

ババぬきにされ他所の子の世話になり

長髪のいっそチョンマゲ結いなはれ

大阪市 河井 庸佑

前よりも良かった通知簿さつと出し

実力はいくつとこかとおきらめる

意識して手を挙げてゐる参観日

親にだけわかる言葉で子はねだり

倉敷市 松下 梁水

友情が失意の箸も割ってやり

老松の意気風雪をものとせず

天高し箸は無用の握り飯

正直な子供が居留守使わせず

豊中市 寺田 花宵

博多帯馴らせ具合は結び頃

病人をうれしがらせる顔見せに

娘の肩に決める太物掛けてみる

色がよし味もよかれと梅漬ける

富田林市 川端 東雲楼

駅員のホームへ水の手際よさ

悪友に優る親友見つからず

値上りムード汚職脱税億単位

幾山河越えなん亡妻よはや三とせ

平田市 久家 代仕男

口うるさく儲けに出して患われ

アルバムは禿げた頃から貼って無し

ただ酒を飲むにネクタイまでゆるめ

釣り仲間釣れぬ方から話かけ

門真市 福島 鉄児

嫌なことあるので宵から寝るとする

交渉決裂赤旗の色も褪せ

云うなれば要領悪いと云うことだ
税務署の眼にも儲けがないと見え

大阪市

木村水洞

違反したバッジも混る開院式

本当の敵は味方にあるを知り

七三に出来ないほどに禿げ上り

親切は素直に受ける齡になり

東大阪市

久米奈良子

立ち止まる日傘の中にある思案

なすままにさせて真紅のバラの雨

短い愛へ女の姿勢

ポナールを観ていもぼうへ来て憩い

笠岡市

木山遠二

日日好日まだ極楽へ行く気なし

お人好手打の後で腹をたて

旧家草茫東京で住むそんな

体中で泣いて涙は見せぬなり

竹原市

山内静水

いびきかく妻としとったなと眺め

人形を買う気になるも旅なれや

気の悪い写真が一次次僕に似て

繙帯の手前びっこを少しひき

京都府

大鶴喜由

小理屈は明日にしましょう月見酒

昭和元禄わが良心の置きどころ

先き様の都合も聞かず好きという

前衛の自負をおもろいなど云われ

大阪市

橋高薫風

四十過ぎ闇の深さが見え初めて

ジンフィーズ美人は美德だと思ふ

暮れ切らぬ花火 心があとさきで

夜の波にふたりの心縫わせおり

西宮市

若林草右

新宿御苑観桜会

奏楽にあわせて花びら舞い下りる

吸いつけた煙草にもある春の風

老衰で死んでも惜しい人にされ

道路掘りかえし税金うめてゆき

高石市

谷沢好祐

いれもので人間様も泳がされ

二十九で管理職とは知れたとこ

小笠原返還

けし粒でも良し日本の土が殖え

全国をアパートにした番号簿

倉敷市 水粉千翁

あの人の値打ちが判るわびを入れ

愛嬌へ男釣銭忘れてる

背伸びして空の広さと話し合い

本番へ稽古の足袋もまっ白い

島根県 藤井明朗

奥様の貫録血圧注意され

遅刻して汗のとまらぬペンを持ち

湯上りの姿へ猫もまぶしく見

約束をしましたと保険屋離さない

藤井寺市 西 いわを

昆虫の恋は喰われて死んで行き

背を向けて厳しい孤独かみしめる

足の裏手の裏同んなじ柔かさ

読み出して時間が惜しいベッドの灯

竹原市 小島蘭幸

若さよしフラインプレイもエラーもし

子を叱る声よ平和だなあ日本

恋になつて長い沈黙

ある夢を棄てた女の幸福よ

雄声氏の死を悼み

堺市 新谷笑痴

あさかやま駅から句集のひとり消え

二三人失恋させてゴールイン

熱弁にコップの水も温うなり

太鼓判貰うた血圧よく喋り

ハワイ 築山快夢起

老朽車買手がつけば惜しくなり

四海波静かどころか倦怠期

まだまだと嘲けるように蠅は逃げ

どの顔も金金金のニューヨーク

大阪市 天正千梢

剃刀も頬にささやく嬉しい日

無礼にも客追出してシャッターおろす

浸蝕の岩を眺めて孤をいやし

新調へあっちこっち出て見たし

大阪市 本多柳志

かおを剃る事から今日のスケジュウル

珍客の話題の父にある慚愧

四捨五入自分に甘い考課表

金にも言わせる腹の黙否権

大阪市 室谷鉄舟

通勤車男同士の汗憎む

不渡りへ銀行慰め云うて呉れ
昭和元禄何処か一本狂ってる
汗知らぬとこで上手に金儲け

美禰市 安平次弘道

世評では良妻俺は肩がこり
悪法も法だとゆずらぬ小役人
金に金生ましますますけちになり
新聞休刊特種が無駄になり

兵庫県 遠山可住

人生をぶらぶら歩くベレー帽
引越しの水にも馴れて母を呼び
子が九人どの子も孫を産んでくれ
空っぽの椅子が淋しく降りつつく

小松市 関戸宗太郎

不在票入れて手術を待つベッド
鳶が鷹生んで学資にもう詰り
立つ気ない仕切りがっちり手をおろし
空き腹へ昼のチャイムの心地良さ

岸和田市 葛城伊三郎

取る事を先に云うたでまとまらず
撥捌き脳の作用か手の業か

子の多い家とも知らぬ熱帯魚
賛成の意味を問われて口吃り

小平市 石居高志

振子振子止まりたそうにただ動き
謂うなれば馬鹿げた酒を梯子する
したいことやれと心に棲む悪魔

倉敷市 野田素身郎

爪を染めだして田植を手伝わず
欠伸嗜み殺して夫送り出し
共稼ぎ疲れた方がさきに寝る

守口市 羽原静歩

右向いて左向いたら過去の人
内職も汚職も知って暮れかかり
そのかみの自決のバンザイ忘れかけ

岡山県 直原七面山

口説くチャンスも与えて女将
よせとは言えぬ美容体操
死だけが二人の愛を引き裂き

室戸市 奴田原紅雨

ヒト科にも牝はひっかく癖があり
汝ら上下心を一つにして汚職
目を閉じてみてもあいつはもういない

市場没食子

今治市 越智一水

宴なれば芸妓が軍歌唄い出し
町会の役の一つもして老後

妻眼底出血

働かし過ぎた嫌いの悔も出る

香川県 三井醉夢

ぬか漬もほどよし夫旅装とく

ゆきずりに傘さしかけて恋めける
かくれ蓑とればしが無いひとり旅

岡山県 横山一声

税金の不足は隣が安すぎる

美人が着れば特価品には見えず
お話がまとまり仲人邪魔がられ

奈良市 村上春巳

泳がない水着のおへそ化粧する

観光のコースはずれた仏様
もうすでに威厳を示す袋角

兵庫県 大江秋月

声がわりして来て妻の手に負えず
見劣りのする犬と会う散歩道

山南町水道工事完成

今日からはカルケの匂うお茶の味

飛びたりぬ蝶々が秋へ低く飛び
参観日できない子だから行つてやり
色街の女素顔で水をうち

出雲市 原独仙

BGの賞与見せ合つてから不仲
蠅叩く位いで憂さの晴れるなら
主任だけ緊張部課長不在なり

鳥取県 森田布堂

帰省した子の耳糞を母見つけ
混血児みやげに置いて島返し
歯を抜いた声で欠席する電話

宝塚市 中村ゆきを

快調に飛ばし他人のノルマ喰い
二伸にて母の悩みに少しふれ
やあやあで通り社長室に消え

岡山県 大森娛句楽

魔の淵と呼ばれて清く水の澄み
継承の美田が子に邪魔孫に邪魔
五カ月と聴かされ予算組み直し

東京都 大山雅城

路郎師を知ら悔ぬあり川柳子

一生かけてやっと地獄を通り抜け
足ればよしそんなに貯めてどうする気

諫早市 大崎 筆 染

明日あるを信じ大地を踏む裸足

八起して父の位牌も安堵する

由緒ある橋も消される都市づくり

富田林市 岩田 美代

事さらに膝を叩いて感服し

私ならこうは書かない相談欄

ゆっくりと楽しむようにばやきぐせ

香川県 岡田 拳法

弱り目を運勢欄まで馬鹿にする

はかに手がないから自棄でぶちかまし

海どんと俺の絶叫受けてくれ

芦屋市 丸川 初甫

合鍵の曲り工合に見る個性

ピヤガーデン飲み干す頃に雨になり

王朝の恋を秘めてる小倉山

泉佐野市 大工 睦夫

なまけ者朝餉のお菜まで文句

ひ弱さは真似た薄着で風を引き

書いて捺す両手器用に左利き

鹿児島市 土岐 トク子
憤りこらえつネオンの宵を視る

合部屋に人生縮図みる思い

虚勢はりおうてベッドで脊をむけ

鳥取県 清水 一保

財産が何だと現代っ児の強気

人間の愛が届かぬ金魚鉢

精一杯働いて喰う飯の味

岡山市 服部 十九平

祖父ちゃんが家系を誇る鋳びつ

決心を妻子に秘めて酒を断ち

歩こうと言うのへ扁平足の異議

松江市 柳 楽鶴丸

気分のよい日は海が美しい

何故何故何故矛盾へ何故をくり返し

じっと待つ心を教えてくれた妻

奈良市 宮口 笛生

金魚池すっぱり沈む雨に立つ

逢うて来た良心妻の目にささり

名月を名月にする芒の穂

岡山県 田村 藤波

長命のおかげ五体は骨と皮

論告は厳し計画的行為

星月夜明日の勝利はおれのもの

ハワイ 上田 紅 溪

常陸宮殿下を迎え

賜わりし握手を胸に温めとき

何もかも引受け委員ちと足らず

古稀過ぎてハンドル取れば目を見張り

小松市 馬 場 魚 山

三寒がずっと続いた冬でした

高いのと安いのある霊柩車

千円で買った南天春が来ず

大阪市 児 島 与 呂 志

まだ青い乳房が恋への大胆さ

心憎い言葉も真実には弱く

勝手な事云わせといて嘘と知り

熊本県 有 働 芳 仙

呼びすてに言つてと女燃えている

先生も生理日らしいカンが立ち

コンピューター残念でした片想い

大阪市 福 井 野 迷 路

古都保存京の街吹く赤い風

底辺の子もやしの子と馬が合い

清流の鮎達水に気がつかず

京都市 都 倉 求 女

子持ちの方が美味いとは惨酷な

塩こんぶ今年は妻の味で煮き

冷房の音だけ隣のビル聞かせ

兵庫県 河 原 みの る

蜘蛛の子を散らして何処で暮すやら

ブザーの第一号が集金人

スポリッとかくせる亀のうらやまし

松江市 中 川 晃 男

言葉尻握られ話外れたがり

よう云うて呉れたと本気にして怒り

ごまかした心に開く水中花

倉敷市 小 幡 里 風

プランより二日も延びた箸枕

週刊誌めくれば恋の花盛り

構えなど云わずのれんに客が寄り

宇部市 平 田 実 男

先生と呼ばせる頃から人気落ち

ロバートケネディの死

意外とも意外でなかった死ともとれ

スタートの歩みを崩さぬ亀が勝ち

東大阪市 森 下 愛 論

ひじ枕しみじみ銭のないを知り
パイプ椅子固く冷たく勤めの身
公認の浮気ちつとも身が入らず

大阪市 水 谷 竹 莊

鯛の骨せせり晩酌よいきげん
孫を抱きあげて余生を考える
老いらくの恋のデートは古い寺

岡山県 藤 原 秋 月

夏痩せの俚秋風に颯られる
体質としてショック死はほつとかれ
百姓はただ作るだけ値は知らず

桜井市 岩 本 雀 踊 子

その気持ちだけでうれしい庶民なり
サービスはただでなかった請求書
握りしめた指の力が慾になり

大阪市 今 西 章 雅

湯の山五在所山にて

おんぶ岩女体上位と見るも居り
朝発ちの傘へ濃緑洗う梅雨

養老の滝

滝汲めば酒になるかに売る瓢

宝塚市 小 畠 無 聖

男照れ女は馴れた甘党屋
悶えてる女のように緋鯉潑ね
髭刺って飯も食わずによい話

姫路市 隠 岐 不 醉

善意の日俺だけでもと右歩き
義理でする見合いというに厚化粧
意議なしへ挙手するともしないとも

愛媛県 渡 辺 暁 童

根が正直の愚痴の多さよ
良いことある家らしく煙も出
耳もとでなく蚊なつかし故郷の夜

大阪市 中 川 滋 雀

親類中騒がせ三行に尋ねられ
金運も信号待ちのまま続き
カロリーをお皿に盛った娘の料理

八代市 永 松 道 雄

朝顔の芽が出て騒ぐ一年生
候補の真顔に票がそれてゆき
寄附酒が多くて研修の日が延びる

守口市 村 田 瓢 太

梅木鉢に入れる土さえない都会

捨てるには惜しくがらくたばかり殖え
睡りたいのにバスガイドよく喋べり

笠岡市 木山 要次

倅せの朝をおいしい深呼吸

粧えど所詮は妻の更年期

ど忘れを問えず夫の自尊心

枚方市 宮川 珠笑

倒産と決めて社長が飲みにする

近代化する村険しい顔も増え

棄権した人も開票待っている

下関市 桜川 不水

公約のあのメイ文は弟子が書き

同伴で投票デパートへ廻り

屁理窟に残念ながら負けておく

大阪市 碑 弓彦

商談の横で金魚が昼寝する

当分は義理で続けた習いごと

執念に生きて無形文化財

神戸市 仲 どんたく

男同士の旅だ証拠を撮っておこ

定年へバトンタッチの子の入社

同窓会

それぞれの職を刻みて友もふけ

伊丹市 小川 静観堂

五十にもなって後妻の顔えらび

暴徒学生いつそ退学やってみな

わたしの診断本態性学生暴徒症

大阪市 吉岡 美房

米黒人騒動

皮膚の色神の誤診を責めるのみ

古時計見上げ警らに出るとする

留置場娑婆は雨かと尋ねられ

笠岡市 松本 忠三

足跡をお膳に残し魚消え

ライターの予備にマッチも持って居り

開眼のダルマおこった顔になり

倉敷市 井上 旭峯

妻の留守三人連れの女客

白足袋をはけばお出かけかと問われ

結局は評判倒れという悲運

京都市 松川 杜的

祇園祭前々夜

太刀鉾ヘネオン王朝の色に映ゆ

お祭りはいいな浴衣の糊が効き

平城宮跡法華地吟行

朝堂院跡芝生は天平の風を持つ

ホノルル

加川カロ

気楽さは干渉なしの一人旅

頼る人先立ち泣虫つよくなり

冷戦が頑固と頑固菌をみせず

岡山県

池田古心

俺の餌嫌いかハエの見向きせず

鯉の奴みくびり竿の下で跳ね

釣りをしても田圃の稲は出来

堺市

青野遊仙

無理すなとゆうて暮しはみて呉れず

九死に得し命此世に甘え過ぎ

知り過ぎた相手縁談まともらず

熊本市

楠田英子

何でも見てやろうサウナ風呂に行く

無難作に咲く淋しさようとまれる

いやな奴と思えば何もかも気にいらず

青森県

木村涼人

りんご摘果少数精鋭主義で行き

髪紅く染めて沢庵好きと言う

米作る人と食う人値が合わず

倉敷市

川端柳子

川柳に吐いて女という心

一億の一人を待ってまだ嫁かず

この時とばかり云うなり叱るなり

大阪市 宮尾あいき

いとしゆうて手打って活けてすぐ枯らし

みさき公園屋下り

あられも無い姿で百獣の王昼寝

限られた水に魚のたのしげに

大阪市 宮地双楽

形見分け恩師の湯衣すこし派手

来客の茶菓へ躰は手を出さず

風鈴の音を聞きつつ冷ヤッコ

大阪市 西川誓二

生国魂夏参拝

拝殿に額ずく五十路のひね氏子

当分は来るなと軽くあしらわれ

マイホーム夢が叶うて越す支度

高槻市 山田季賛

修理工が来ればエンジン素直なり

物ごとはおちついておちついて考える

水虫が気になる今日は日曜日

松江市 岡崎祥月

路郎師三周忌法要に参列して

師の遺影いのちある日のはしい顔

妻へのみやげ達者でいる次男

大阪市

川口弘生

足の裏似てると親子で笑い合い
訪れて絵葉書の花咲いていず

倉吉市

奥谷弘朗

円満が胡瓜をきざむ音に満ち

辛抱が金と信じていた明治

泉大津市

高津徹也

電柱よお前は立っているんだぞ

冷遇と知りつつここを離れまじ

和歌山市

土谷城石

駅長が飯も焚いてる山の駅

大物は一寸散歩に飛ぶハワイ

加賀市

細呂木魯木

二代目の責任遺産にしがみつ

旅先で妻にそっくり血が上り

和歌山市

垂井葵水

道具箱がついでバーの昼を知り

待たされる駅の時計も疑われ

和歌山市

西尾公作

駅弁を買い次ぐ旅のたのしさよ

美人だが鼻に名取がぶらさがり

西宮市

島居百酒

骨までも愛して親はほっとかれ

梅里先生追悼

妻の手が一果も無駄せぬ庭の梅

堺市

高橋千万子

マネキンの水着泳げばはずれそう

老いの身は五分乗るバス長く待つ



川村好郎

春の塵被てここも同じ土産もの

泥に生く業捨て切れず連

環のない蚊帳にも慣れて老夫婦

目覚しが約手約手と鳴り起し

急所突くまじわたしにも古い傷

西尾 栞

夫婦は二世おたやんやけど辛抱する

看板屋交通事故を腑敢する

水着の娘おへそのごまを気にしてず

お通夜にゴメンゴメンと箆笥あけ

観光ズレを口々唧つ宿浴衣

北川 春 巢

婦省子の話日日（ひにち）をかけて聞き

ストレス解消を口実に毎夜飲み

案の定掃除機装飾用となり

通勤車の中で夕立くぐり抜け

スランプだスランプだとテレビばかり見て

若本多久志

老妻の軒の中に安らけさ

墨すれば孫不思議そうに問い

湯の宿の朝酒極道も仕果てた身

月給はただくれるものと錯覚し

東京にて

宮城前敗戦知らぬ子が集い

菊沢小松園

籠の鳥故郷の方を向いて死に

愛という字を書き慣れて嫁き遅れ

言葉尻女ぐらしは濁ぐす癖

くちづけを見ててもころも昂らず

奪われましたと胸の釦も千切かけ

清水白柳

今東光議員登場

筆禍舌禍チヨバツなどはクソクラエ

同役に何だかひねた一年生

横山ノック議員登壇

殊勝げに初日をあけてたよりなし

黒潮おどる

紀州路へ

＜白浜ゆき＞ なんば発時刻

急行 第2きのくに…(毎日)…12時40分発

急行 南紀3号…(毎日)…16時38分発

急行 しらはま…(土曜)…13時10分発

＜新宮ゆき＞ なんば発時刻

急行 南紀1号…(毎日)…7時45分発

夜行直通列車…(毎日)…22時09分発

●第2きのくに号は座席指定券を 他の列車
は座席整理券を1週間前から発売いたします

お問合わせ・南海交通社
(641) 8686 (341) 5038

南海電車



近 詠

長野県 高峰 柳 児

ライバルへせてのはったり胸を張り
 やっと寝た子へ内職の灯へ正し
 感激をされ出まかせの嘘あわて
 初耳ととほけて弱身など見せず

今治市 長野 文庫

手紙引き裂いても記憶ひき裂けず
 平凡な人間にする酒の酔
 何かしらくすぶっている不気味な世
 寄附のとき故郷が思い出してくれ

小松市 山上 千太郎

ぎりぎりの嘘神様もお許しで
 銀行の扉の重さこれでよし
 宮の森一夏を貸す蟬しぐれ

大洲市 米沢 曉明

史実とは別にドラマの面白し
 教養とやらがひまどる恋にする
 奥さんの素顔知ってる御用聞き

今治市 月原 宵明

この下にスリップブラジャー透ける服
 遠雷へようやく長い尻をあげ
 紫陽花の誠実雨へみな開き
 夏祭あめ湯に変わるコココーラ
 後楽園ひとりで歩くので疲れ

和歌山市 秋月 宏方

植字工も笑っただろう週刊誌
 なんば新薬出ても水虫まだ頑固
 丸刈で通し平凡だった父
 ありがたし病の句などない句帳

名古屋 長谷川 鮮山

はなしすることなく母と居て嬉し
 着こなしたただの女でない女

大鉄川柳会

保	吉	辻	丸	植	大	宮	都	山	永	松	松	阿	正
西	原		川	村	江	口	倉	田	尾	下	川	万	本
岳	紅	白	初	客	秋	笛	求	季	英	た	杜	万	水
詩	月	溪	甫	遊	月	生	女	賛	断	み	的	的	客

川傍柳 初篇研究

(六十三)

前田喜代人 川端柳風

岡崎重義^故 高須啞三味

清博美丸 十府

藤井和雄 岡田甫

504 山号を書いたのれんを下戸くぐり

門柳

えられてゐる。

高須 浅草の餅を詠んだ句。浅草の観音堂へ参詣かたがた遊びに行った連中の中の下戸が、浅草餅へ行ったという前の「餅屋の向う」より少しはましな句。浅草餅は浅草寺境内にあり「金竜山浅草寺」といい、黄粉餅で歴史の古い名物。最初は天和の昔、桔梗屋安兵衛が草分けで、伝法院前の大棟の下に葦簀張りの小店を出していたが、だんだん繁昌してその向う側の馬道の角、錦袋円薬店と二十間茶屋との間に移ったことが「江戸名所図絵」に記されている。その看板「金竜山浅草餅」は上野輪王寺宮の御親筆で、かつて宮が伝法院へお成りの時、この餅の献上を受けて御意に叶い書いて下さったという説があり、万一不敬があつてはと紺法被に金棒の番人が二人ついたと伝

藤井 礎稿はくわしい。ただ小号を書いたのれんくぐる奴は、そのまま無事に女房のもとに帰り、上戸は吉原へとの裏の意が含まれている。下戸罵倒の句。

丸 賛。藤井説の如き意味も含まれていると感じられる。

岡田 同。

505 ねだられて母いが栗をさほでぶち

五 扇

高須 木にある栗を「あれが欲しい」と子供にねだられて、その母親が、その栗を落としてやろうと、竿で打っている情景である。「ねだる子」には面白い句が多い。

ねだる子に秘蔵の桃を取り始め 玉・3

ねだる子に無いかおせる菓子袋傍 五・14

ねだる乳母はあぶくを二つふき 桜・11

丸・岡田 賛。

506 式三人おろして加賀へ帰る也

車 弓

高須 鏡磨の句。青銅鏡のくもりを磨く職人で、多く加賀国の老人であり、「平日も来れども寒中を専ら」(守貞漫稿)としたらしい。その商売用の水銀が堕胎に効ありとしてその始末に困る女性に請われて、たまには内密で分与した。そのことを「二三人おろし」と言ったのである。「鏡磨」については、

加賀鏡の字を抜き研ぎに出る 一四・4

隣国のふんどしをする鏡とき 八・13

鏡笠に不器用なのが鏡磨 一一・38

鏡磨千代も存じております 一九・14

わが顔に見あきて加賀の国へ行き 一三・39

わが面で試みをする鏡磨 宮四・11

等考証句がある。また堕胎についても、

つみ髪はおろし薬を自身さし 末三・12

何ばへい出せばおろすとせな困り一四・13

前田||贊。加賀と鏡磨と墮胎。常識的で平凡な句。「鏡磨中条流も知つてゐる」

丸・岡田||贊。

507 三年の内に齒もはげ眉もはへ 眠 狐

前田||既に数回出た松ヶ岡の句。「たった

三年とんせいを嫁はする」(14ウ三)「三

年が間有髪の尼になり」(48ウ七)三年間

のうちに、嫁した当時の齒をそめ眉を剃つ

たのが、齒もはげ眉も生えたという句。

高須||松ヶ岡は、第五世住職用堂尼(後醍

醐天皇の皇女、護良親王の姉)のとき、満

二十四九月(足かけ三年)で縁切りと短縮

された。眉が生えたり、齒が白くなるのに

は何もそんなに日時はかからぬ。ただ松ヶ

岡を言いたいために作った松ヶ岡句にすぎ

ない。

丸・岡田||贊。

508 ほろろくをふせ上下で付て居る

米 子

前田||「ほろろく」は炊り物をしたり、殿

中では婦人の便器に使用したりした粗末な

土器で、ここでは、お齒黒をつけるために

用いたのではあるまいか。上下をつけて立

派ななりをしているが、お齒黒用の器は、

ほろろくなので粗末であるから目立たない

ように、ふせてあるといったところではあ

るまいか。わからない。

岡崎||舟遊びの舟上で、供の侍が威儀を正

して奥方が御使用になられるほろろくを伏

せて待機している。

清||岡崎氏説贊。但し、上下で待機してい

るのは供の侍ではなく奥家老ではないか。

藤井||贊。上下でついているで、家老・侍

の区別よりも威儀を正している様子が示さ

れている。そこをねらったおかし味だが、

便器係の武士、ご苦労である。

高須||贊。

宝船ほろろくのいる神もあり

ほろろくは舟でも豆の用に立ち

便筒もほろろくも積む壇の浦

平家ではほろろくのいる船を出し

丸||成程。小生には解けない句でした。

岡田||船中で女子が使用する便器のホウロ

クなど、よし奥方用のものでも、奥家老ら

男子が関知する筈なし。お付きの侍女の役

目であった。また奥女中の舟遊山にはホウ

ロクを持参せず、必要に応じて隅田河畔の

料亭のある所に舟を(あるいは供の小舟)

着けさせる。まして奥方や姫君の場合は、

舟を岸へ着けると命令すればよく、この説

には賛成できない。まだ確説を聞かぬし、

とにかく難解句。後考。

前田||既出「両方へ抱てのませるはづかし

さ」(15オ一)「やす／＼と三人に成る恥

しさ」(41オ一)と同様、双生子をよんだ

もの。この句は恥しさといわずに「里へや

り」でこの感じを暗示している。やはり平

凡な句である。

岡崎||世間テイをはばかり、産婦にはかく

して、一人は里子に出す。

清||贊。但し産婦にしてみれば、一人産ん

だか二人産んだか、わからぬはずだからこ

れは作った句。

高須||少しドギツイ解だが、嫁も孕んだ下

女も孕んだ……で、下女をこっそり里へ帰

したではないか？一人は独りで、二人のう

ち一人でなく、下女を独りででは如何？

下女が笑？産所でもしえもしえ 一四・11

などという句もあるのだ……。

丸||素直に双生児と解したい。

岡田||同。

中島生々庵著

川 柳 講 座

50円封入・一冊進呈

偶

感

三

題

石原青竜刀

「一応「三題」としたものの、それほど「たいそれた」話ではないのだが、最近の「川柳塔」の作品を読んで考えたことの三つについて書いてみる。

1、現代ということ

向い風くるりと和服つまさばき

(藤井明朗)

この内容の発見そのものは「柳多留」時代と異なるところはない(例えば「向い風嫁あわせでもあわせても」…嫁は娘と書いたかもしれぬ…という名句がある)しかし「柳多留」時代はもちろん、昭和前期(太平洋戦争以前)までの時代においてすら、このような句の場合「和服」とは言わなかっただろうとおもう。すなわち「和服」という感覚は戦後の、

しかも終戦直後でなく、ごく最近のものであり、いうまでもなく「洋装」が街頭にはらんしているというイメージを前提としての作とおもう。その点にこの句の「現代的意義」があり、かたんに内容(向い風に対する女の生態)だけを見て「ふるい」と評するわけにいかない理由がある。つまりいうならばこれは「現代風俗吟」である。ただし、「つまさばき」が緊密不動の表現かどうか、したがってこの句が完べきものであるかどうかということは別問題である。

2、旅行吟のなやみ

秋吉台

石の饒舌 雲の黙

(橋高薫風)

短詩文芸(柳俳共通)において旅行吟のなや

みは「前書」なしにわかる句が作りにくいということである。一般的に「前書」に頼らないでわかる句、すなわち一句としての独立性を尊重することが通念となつているところからのなやみであるが、この作はその点一応みごとに独立性を達成している。しかし、その反面にやはり「なやみ」から完全に解放されているとは言えないウラミがある。あるいはこれは多くの個人的な感覚かもしれないが、上五の「秋吉台」がどうも「説明臭」が強く感じられてならない。「秋吉台」を前書にして「石の饒舌 雲の黙」という感覚的表現をもっとよく活かしたものにすれば、さらにすぐれた作品になる可能性があるとおもうのだが、そうすると「独立性」すなわち「前書なしでわかる句」という本旨にそわなくなる。けだしこの「なやみ」は短詩文芸の宿命であつて、永久に解決できないのではあるまいか。

3、表現における川柳性

遠き国恋うるか象の鼻ふりやまず

(天正千梢)

この句の表現のしかたは俳句的であり、したがって作品として「川柳性」に乏しいという評もありうるとおもう。川柳的に表現すれば「象鼻をふりふり遠き国を恋い」といったよ

うなところだとも思うが、あるいはこの作者は、そのような「川柳の表現のマンネリズム」にあきたらず、わざとこのような「短歌の想念」を基調にした俳句の表現に新味を求めたのではないだろうか。たしかにこの句の姿は伝統川柳に比べて新らしい。だが、俳句のがわかられると一向に新らしい感じはしない一種の「無季俳句」にとどまるのである。

この点、前掲の「秋吉台」の句についても同じことが言えるとおもふが、ばくは柳俳の区別を末節として、ひとしく「短詩文芸」として鑑賞にたえるものであればよいという態度をとっている。ただ、文化のバラエティを求めるという意味から「川柳性」ということについて、なお追及を続けたいと考えている。したがって、この句自体の評価とは別に、この句の内容を川柳性のある表現によってうたってみてはどうかという奢望をもつわけである。

ここで「川柳性」とは何だ、とひらきなおられるとメンドウなことになるが、ばくは、この句の場合について言えば「遠き国恋うるか」というのは「短歌の想念」であって、川柳はそのような想念を沈潜させてズバリ「遠い国を恋い」と「主抒情」的に判定するところに身上があると主張する。だから、この句を定型的に整えて「遠い国恋うるか象は鼻を

ふり」「象鼻をふりふり遠い国恋うるか」などとしたのでは川柳性が弱く、あくまで「象鼻をふりふり遠い国を恋い」と断定的に言ったほうが川柳性があると考えるのである。ただし、今日の若い世代が、どちらに感動をおぼえるかということになると、ばくにはよくわからない。あるいは原作のほうにより感動をおぼえる者が多いかもしれない。

動くテレビに

動かぬ証拠

不二田 一三夫

電話に映像が出るようになったら、さぞ便利?のわるいことだろうと思う。

ある日の午後二時から三時までの三十分、Aテレビへ秋田実先生に連れられて出演?した。もちろん漫才作家としてだが、雑誌「漫才」創刊の弁という内容のものだった。

ふつうならテレビなどへ出してもらえるガラではないのだが、恩師のお情けで、はじめてアップで二分間ほど、しゃべらせてもらった。実はこの日、B放送局へ自作の原稿を持って行って、その場でボクの声を入れることになっていたのである。時間は四時から四時

三十分ということになっていたのだが、二時ごろにB放送局から早く来てほしいと電話がかかってきた。こまったのは家の者である。「B放送局へ行く」と云って出てまいりました、まだ着いておりませんでしょうか」と、トボケたものの、目の前のテレビにばくが映っているの冷や汗ビシヨリだったそう。

もし、先方の人が、その日のテレビを見ながら、ばくのほうへ電話をしていた、としたら、このウソは漫才を地で行っていたことになる。

この場合、野球のようにナマ放送だから、よっぽど考えて返事をしないと、どエライことになるとおもった。会社をサボって若い女の子を連れ、野球などにはユメユメ行くもんじゃないデスゾ。テレビはこわいデスゾ。

★

大阪文化祭川柳大会

日時 11月23日(祝) 11時開場
会場 中央公会堂(三階集会室)
講演 郷土史家 鷺谷樗風氏
兼題 「読書」宣介選・「公会堂」好郎選
「新聞」雲雀選・「あいさつ」俊作
選・「文楽」塊人選(席題二題)

締切11月10日着限・
宛先—北区中之島— 大阪市教委内
大阪文化祭川柳大会係。

路郎先生の初心時代 (完)

清水白柳

麻生路郎

路傍より (短詩) 三十六句

疑の晴れて短刀持ちあぐみ
博士の計書肆は遺稿を争いて
諸語を交へて博士一講話
雅号千松としての句は以上までしか手許に
ない。

千松 同 同

番奉昭和四十年八月号に水府先生が書いて居られる「ああ、路郎君」の中に「はたち代の者五、六人が寄って雑誌「わだち」を出した。むろん路郎君も僕も加って——たのしかった」。とある、その「わだち」は明治四十四年七月一日発行で創刊号が出されている。菊版で内容四十八頁、消息欄は龍郎の署名で編集後記は路郎の署名になっている。発行所は短詩社。同人十一名の名前がある。藤村青明、浅井五葉、岸本龍郎(水府)麻生路郎、馬場由三(緑天)杉村歌三(蚊象)其他五名である。評論は「短詩概論」二頁麻生路郎で、句は全部短詩として発表されている。水府先生十九才、路郎先生二十三才の時である。

前の人の前に人ありはらだたし
自動電話ここにも人は先にあり
絶え絶えの恋想う日のやるせなさ
弱い男が強い女にほられし
勤めたり勤めなんだり五月雨
けだるさにふとんを抱いて寝たりけり
君とありし日は一合の酒に唄いぬ
ものうくて電車を待つにうづくまる
消息欄には麻生路郎氏西区市岡町五十七番地に転居せられた、とある。尚巻末広告には「矢車」二十七号内容としてその中に「このごろのさびしさ」(詩)麻生路郎とある。わだち二号は「轍」八月号として八月一日に出ている。内容二十八頁菊版、

麻生路郎

氷囊 (短詩) 十六句

死の傍を横ぎる如きわが昼寝
美はしき金魚の鉢の冷たさよ
夏瘦せの身に移り香の堪えがたき
未だ迷うところを君のひややかさ
肌ふれておののきし頃を想いけり

こちよき氷囊の痛たさ夏の屋

消息、編集後記共路郎と署名があり。

巻末に「矢車」二十八号の広告があつて、「梅雨の日」(短詩)麻生路郎とある。

◎明治四十四年十二月二十日発行の「蓍」十二月号の消息に「麻生路郎氏は東京樋口支店にあって、外国文学の研究に余念がない」という文章がある。そして編集後記には、「麻生路郎氏より何か送られると云う通知があつたが、編集迄には終に作品に接しなかった」。とのせられている。筆者は「水」とあるが、これは土岐水光氏である。

発行所は京都市でこだま会となっている。「蓍」にのっている消息の樋口支店のことについて私が伺ったことがある。それは先生が亡くなられる十日程前のことで六月二十八日だったと思う。一時間程先生のベッドの横へ座つていろいろお話を伺った、その中に東京の話が出たので手帳の端へメモして置いたのがある。

それには宗右衛門町の富田屋の親類で金屏風屋をしていた樋口商店の東京支店に居たことである。樋口支店の店長は樋口氏の息子さんで内務省へ勤めて居られたらしい。そして独逸語を学んで居られた。路郎先生は支那語を学んで居たので仲良しだったそうだ。

よく銀座を歩いたということでもあった。その樋口氏が経営して居た神田のローカン堂(どんな字を書くのかお聞きするのを忘れた)へ彫刻を売りに来た高村光太郎氏とも知り合

ったということである。その彫刻というのは屏風の縁の彫刻だったらしい。その時分に画家の杉浦非水氏が三越の図案部長をして居られて、外国のデザインの本を沢山持ってきて居るのでよく見せてもらい、屏風のふちへ焼絵を書いたものだ」と言つて居られたそんな関係で川柳雑誌の表紙を二十六種位い杉浦非水氏を書いて呉れたのだとの事であった。色々な話を聞いたのだがメモしたのはこれだけである。

水府先生の「ああ、路郎君」の中にこんな一節がある「大正二年雑誌「番傘」が出る時君は東京に居た。一年後帰阪して同人に加わった。「番傘」初期の何月号かは、君の新婚の愛の果から、ハトロン紙を切つてのりをつけて、三人で発送した。「これを見ると、東京大阪間を何回も往復せられたらしいが、大阪に落着いて新居を持たれたのは大正三年という事になる。

大正四年八月に「雪」一号が出た。有名な思はじと椿の花を火に焙べて 日車 の句が発表されている。

「雪」二号九月号からは路郎先生の句が異彩をはなつのである。

悼 青明

路郎

浴衣がけ一寸いてくる旅なりし
絶息ときに落日は瞬けり
タングステンの破裂か青明の死か

祈 禱

路郎

感謝しつづ妻が洗濯を見ていたり
祈禱すんで大きな月を吸うて立ち

横臥になれば涙湧くなり風に揺るる蚊帳

「雪」三号 十月号

インキの濁り人生のむだ費ひ

路郎

昼の疲れか背をむけた妻の息
娘を抱いて聖書の行を見失ひ
妻や待たむ靴音を高めんか

SOFAが欲しいという妻のうら若く
靴下をなげ出しぬ今日の汗かな

「雪」四号 十一月号

浪花座を出て

路郎

前茶屋の間からみゆる水ゆらゆらと湧し
ふりやまずふりやまず端書二三通
手がすいていつそさびしい日曜日
一人がへり二人がへり事務室に灯がともり

襦袢干すよろこび
襦袢干すよろこび

路郎

うながされて出勤る赤靴は泥にまみれたり

「雪」五号 十二月号

中年になつて考へることをみ多き
白髪一本僕のをさびしうす

路郎

白粉を洗い落せばさびしからんに
「雪」六号 大正五年一月号

路郎

二 食

路郎

妻に中将湯をのめめといふ寒さ
思ひ出して電球かへに行く日脚
二食でよしとようように起きるかな
鯉節に男のちからかるる

「雪」七号 大正五年二月号

路郎

ひき汐に捨てしものあらはに見ゆ
妻の顔 中の間の暗き火に見たり

路郎

「雪」八号 三月号

角ばつた椅子の吐息の朝となり
地のおい雑誌の上に流るる

路郎

「雪」十号 五月号

砂うち払い電車まで何ンにも言わず
多喜之屋の二階にわが足袋のきたな
去年の子今年の子泣いてる中へ蕎麦が来る

路郎

「雪」十三号 八月号

千日へ曲れば一つづつ灯がうごき

路郎

「雪」十四号 九月号

茶屋の物干に大阪のひろさみる
煙草の火が光るのみの物干
物干にいて逢つてゐるのを見つけたり

路郎

「雪」十五号 十月号

面会謝絶してばせを葉の屋
私の手許には十五号までしか無いので雪に
関係したものは以上で終る。

「土団子」一号 大正七年七月号

巻頭言

路郎

現代の柳埴は青い玉と赤い玉の時代である
青い玉は静のである。宝曆、明和の川柳は
この意味に於て青い玉である。

赤い玉には未完成の芸術を、完成した芸術
にしようとする努力がある。煩悶がある。

「土団子」は柳界の平和を打破して、新ら
しい川柳王国を築くために放たれたるピス
トルの一弾である。

路郎先生の当時の情熱が偲ばれる文章で
ある。この当時は川上日車先生も路郎先
生も三人の子持であつたという事である

三人の子が家いっぱいに見ゆるかな 日車

いいたいこともいえず庭の樹をながめ 路郎
起きんとする枕元を二度掃かれ 柳珍堂

「土団子」三号 九月号

娘を死なし暫く遊ぶことにきめ 路郎

米の騒ぎに物忘れする夕也 同

当時の状況をうかがう事の出来る作品である。

「土団子」四号 十月号

ちちくさい嬰兒を厭うほど疲れ 路郎

たべてもたべなくとも麦めしに向い

泣き顔をみせずお茶漬だけはたべ

頬杖に秋の空氣のやはらかさ

布団のそそぎ氣にしているうち秋となり

当時の「番傘」から転載

出刃庖丁鯛に触れたは一年目 葭乃

出雲では添はしておいて水をさし 路郎

象思へらく俺は孤独だな 同

あんたのようにいうてもと返辞せず 同

「柳太刀」再刊一号 大正七年五月号

酒に罪させているなと思うのみ 路郎

「柳太刀」二号

同 六月号 路郎

亡半厘坊兄に捧ぐ

若死の須磨は浄土に近いとこ

恋ありやなしや桜のように散り

柳太刀は大正六年十月——七年三月迄と

大正七年五月に一号として出ている

「街灯」一卷十号 大正七年十月号

八月の作

麻生路郎

ねむた眼に朝顔の葉が揺れている

病児の眼に映る朝顔はさびし

理屈通り朝顔の花咲かせ
パンと珈琲と朝顔の夏なりし
落ちそうに朝顔咲かす二階借

街灯は岡山市紙屋町街灯詩社発行、四六

半裁十六頁で、宝年坊、我楽太、鉄羅漢

の三人が同人で鉄羅漢編集、十号で終る

「後の葉柳」一号 大正八年六月号

あきらめをもつ花嫁のしんし張 路郎

其日暮しの家に基督様が立ち

「後の葉柳」二号 同 七月号

思ふまいとすれど月給はたりず 路郎

一つ蚊帳にさかなのやうにならぶ夜ぞ

酒の毒知らぬにあらざ知らぬに非ず

「後の葉柳」三号 同 八月号

天井の低さも知らず子はうまれ 路郎

食ふだけもないのに今日も手がよこれ

後の葉柳は路郎先生編集発行で樹型二つ

折。日車、半文銭の句がある。三号で十二頁

「大正川柳」大正九年二月号の消息欄に

次の文章がのっている。

麻生路郎氏は大正八年十一月限り、工業之

日本社を退き、某社の依頼にて、外国為替

の研究に没頭し居らるる由。

其著「懐手」は今月中に発行の予定なりと

来信ありたり。

「大正川柳」同年八月号に

ボケットバック

麻生路郎編輯

大阪市北区曾根崎中二丁目

ボケットバック社

一汗を流すハッ手に手が届き 路郎

の句が紹介されている。

「大正川柳」同年十二月号 一〇二号に

新刊紹介

「川柳漫画懐手」 麻生路郎著

「大正川柳」大正十二年二月号に

「麻生路郎君」安川久流美 という文章

がのせられている。同じく

「大正川柳」同年六月号に

「麻生路郎氏の書翰」が四頁掲載されて

いるが長文なので割愛する。

「落標」二七号大正十二年十二月号

ぶぶづけの客に馴染の小料理屋 路郎

この翌年二月に「川柳雑誌」が創刊されたのである。

「路郎先生の初心時代」補遺

大正三年八月号「イシズエ」十二号金沢市

北都川柳社発行に「大阪より」を執筆

大阪より（千九百拾四年六月）

麻生路郎

自分はながい間海を見ない。

あのサラサラとした砂の上を、ザックザッ

ク、と踏んで沖の荒れているのを見ていたい

夜の大阪に親めない身には、只一室にばかり

いて何かと考へさされている。

×

抽入やつこの売声がきこえます。

今年になって始めてです。一日一日暑くな

るんです。

×

インクスタンドの蓋のニッケルがギラギラ光っています。ウラツチの硝子がピカピカ光っています。私は光るものはみんな嫌いです。

同年九月号「イシズエ」十三号

夏 日 集

大 阪 麻 生 路 郎

間男に犬がなれてる気の毒さ
有るのも無いのも種ぎりの暑い事

新 刊 紹 介

大野風柳著「浄机亭川柳随想」

柳都川柳社二十周年の記念に風柳主幹三十代の文集として発刊されたもの。風柳イズムが強調されていて、誠実で感受性の強い人物像までが浮彫りにされている。

むしろ、私はくやしかった。しやくにさわってしかなかった。なにか、出しやばられたようで、それでいて心憎いばかりの共鳴をおぼえるのである。

それは、去る二月一日にNHKからテレビ放送された「明日は君たちのもの」で朗読されたサトウハチローの「五七五で何でもよむ、七、五である。

五、七、五でよむ

悲しみをよむ

さびしさをよむ

母の声をよむ

寝がへりが見つけ灯明消しに立ち
坊主持危機一髪のところを外れ

外六句

番傘を読み

須恵廼家

（前略）女流作家なんて稀ですが、よしのといふ人がいますね、その句などに先曳の犬落ちそうに舌を出し というのがありますが、矢張何処か知ら女の人の詠んだ句

友だちの姿をよむ

待ちどおしい おやつをよむ

はらぺこをよむ

風にひりつくあかぎれをよむ

ありのままよむ

五、七、五でよむ

（中略）

五、七、五でよむ

やりきれなさをよむ

けんかしたあとの

あじけなさをよむ

遠いお使いをよむ

春を待つ芽をよむ

蜂の子のうまさをよむ

ものすごい足のしびれをよむ

つづてよび出す

しゃっくりをよむ

思いのままよむ

五、七、五でよむ

私は、妻子が眠ったあと、しずかな書斎

らしいですねーと思いました。
捨てたのが死にはせぬかと色男

飯事も値切って買ふ面白さ

船細工残った鶴は首を垂れ

此頃から路郎先生と安川久流美氏の交際が始まったのであろう。「イシズエ」は久流美氏の編集、発行である。

路 郎
路 郎
青 明

でこの詩をつぶやく。

すばらしいなと思う。そのあとですぐやし涙を流す。それは、私の作品をふくめて、全国の川柳家の作品が、この詩に比して胸をそらしすぎていることに気がつく。

足が地についていないのである。

庶民の中で、ときには文学的に、ときには俗っぽさを保ちつつ、日々発展の途をたどってきた川柳なのに、ふくれるしもやけに気がつかず、あかぎれに目をそらし、春を待つ芽を忘れ、足のしびれにしかめづらをしながらすぐにもとの顔にもどし、しゃっくりを止めようと努力する。これでは、川柳作品は書けぬはずである。だからこそ、こんでもない人に、出しゃばられて、黙ってしりごみをするばかり。いまに見ておれ、川柳家はくじけないからこそ、その価値があるのだと――。

（橘 高 薫 風）

くさい話と銃床詩

東野 大八

久しぶりに中国人のCさんと一ぱい飲んだ。岐阜市外れのナマズ料理屋の昼下りであった。

大分ごきげんになって庭先遠くはなれたばかりへ行くと、一人用だけで中味が詰っている。しばらくつたつたっていると、フラフラとCさんも現れた。

「一人満員だよ」

といって、どうだ並んでやるか、と私が声をかけると、彼は二つ返事でよろう、とコンクリートの、つ立つて放尿をする方へ並び二人とも後向きになった。五人は並んで処理できるほどの広さなので、しゃがみ込んだ私等二人は至極ゆつたりだ。前は植込みで、雑然たる野趣に富んでいるのが、この場合似つかわしい。

中国では、日本のような便所の間仕切りはない。ずらりと十数人がお尻を並べ、顔をそ

ろえてやる。だから大小便の区別は丸つきりない。北京銀座の口明けにある、東安市場の公衆便所もこの調子なので、初めて一見したときは度胆を抜かれたことである。しかし、その野放図さはやはり中国四千年の、緻密な人間性のなんたるかを語り得て余すところがない。悠然と放屁し、壮大な排せつ音を誇り、音たてて手バナもかむのである。顔なじみ同志だと、世間のウワサ話から、趣味、風流の話に、鹿鳴春と東来順のエビ料理はどちらがうまいか、などと話し合っている。人間椅間をブラブラさせて、アゴをさすり鼻先をなでながら、心ゆくばかりおしゃべりするとかの楽しみこれに過ぐるものはない。

私とCさんは、いつとはなしにそういう中国式WCのむかし論義をやりはじめたが、一向に傍らの独房の如き先客の戸がひらかない。Cさん、私の方を眺めて、人の悪そうな

顔で小指をつつ立て、片眼をつぶった。成程そういえばその御仁は、御婦人らしく、ついに私たちが消え去るまで、ちやちなその板戸を開かなかった。

Cさんの説に限らず、中国式便所が普通のことであって、日本の方が特殊なのである。アメリカなどでも田舎へ行くと中国式で、ホテルなどのフタつきジョッキみたいなものは使わない。別れているといえは、男女の別ぐったのか、これから勉強しようと思っているので、急場の間にあわない。しかし、日本式の独尿形式で大助かりしたのが軍隊であった。殊に初年兵にとって、廁こそは天国であった。

廁といえは、中国では便所のことを茅廁マオスといった。日本の字源はここからであらう。中国のコトワザの一つに

鶏不撒尿 各有一変

というのがある。つまりニワトリは、おしつことうんこと一緒にする。変は便と同じ発音で、この用語は、高給とりのくせにいつも家計はピーピー、ニワトリの排せつ物と同じだ、という意味などに使用する。中国では随時便飯（一ぜんめしや）式に便を使うが、あくまで便所は廁の字しか用いない。だから向うさまにすれば、めしもなくそめいっしよで、

「御婦人用」などとかいてあると、人のいい中国人は眼を白黒する。なぜなら「婦人を御するに用いる」と判読するわけだ。

ここまで書いてみると、私は花月亭九里丸の漫談を思い出した。私の小学生のころで、学校へ彼が漫談をやりにきた。

「女の方が、便所の前に立ってモゾモゾしている。一体どうしたの、と連れがきくと、その御婦人は便所のドアを指さして足踏みしてんだな、なんだと思えばそこに「オス」と書いてある」

メスとオスとをもじった話で、私は大いに笑ったことを今も覚えてる。

ところで皆さん。いきなり下の方の話をながながと書いて、びろう千万なことで大変失礼いたしました。最近私は便秘をやらかし、やっとたつた今、その解放式を味ったばかりで、その欣喜愉躍のほとばしりがこの駄文なのであります。私事にてごめん下さい。

最後に、こんどはキレイな話で、サッパリといたしましょう。

私が中国戦線で大怪我をしたときのこと、その最後の戦場で、一人の中国人兵士をとつかまえた。彼はチェッコ銃の射手で、百発百中の名射手。手づれがしてびかびかしたその銃身の木把に私が眼をやったとき、そこにたった四文字「剿滅撤尿」とあった。小便み

たいにやつつけるという意味らしい。つまりもう四文字の何かがそこにあったのが、手づれして消えてしまっているわけだ。

「この銃は七年も使っている」

と彼は語ったが、消えた文字は忘れたと言いつ張っていたが、明らかにそれは「銃床詩」だ。

ソヴェト軍が、ヒトラー・ベルリンに進攻する時、大砲や戦車や軍用列車の肌に

「進め、ベルリンへ」

と書いた。中国では、これにならって軍隊用兵器には一齋にこの方法を用いた。殊に八路―中共軍が得手としたもので、競って自分の武器に銃床詩を書きつらね、やがてはそれがすさまじい士気昂揚の精神的糧となった。

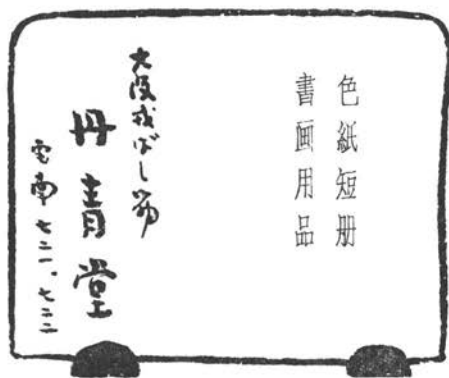
日本降伏後に、中共軍はこの銃床詩の効果に絶賛をおくり、人民中国の詩歌運動はかくして興る―と馮乃超も激賞したほどだ。自己の立功計画を兵器に刻み込むことによって、その心はつねに敵概心をあふり勇躍し、それが戦士各自の文化水準まで高めさせた、そういつている。かくしてそれが戦後、中共軍内での朗読詩となり、それが「壁詩」に移った。紅衛兵の壁新聞のハシリは、実にここから発想されたものなのだ。

これにくらべ日本軍はどうであったか、ちよつと小銃の木肌にキズをつけても「三八式

歩兵銃殿、なんとも申わけございませぬ」と官姓名を名乗って腕の抜けるほど衆人監視の中で捧げ銃をやらされた。一事が万事この調子で、銃床詩など書いた日には、顔が裏表入れかわるほどぶんなぐられたことである。

さめさめと泣くは廁の一つ星、言葉一つも吐けぬ口惜しさ

私の戦友はこういう落書便壁に残し独房のごとき四壁の中で自ら死を選んでいった。日本の廁の個室はこうなると死ぬことをさえ教えている。かがやかし敵さんの銃床詩にくらべ、血と涙にまみれたわが糞尿詩の哀れさよ、かくて日本軍閥は滅んだ。



秀句鑑賞

—前月号から—

後藤梅志

童心になってスツてんコロリン

(古方)

この句は余程かわった句であるようだ。普通、われわれは、童心に返える。という程度だが、この句主は童心そのものなのである。この句は、スベツて転んだのではなく、よっぽどしくじりを犯したにちがいない。

しかし其の人が、童心そのものであれば、科がむべきではない。この句もその如く、なんとも知れず可笑しい。

越後の良寛さまも、天衣無縫の人で、よくしくじりを犯したらしいが、作者もそうした人でもあろうか。但しアルコールの分量はせいぜいお氣をつけなざるがよろしい。

満場一致つむじ曲りを役に推し

(代仕男)

「満場一致」がこの句をユーモラスにした。一と理屈こねるものは、どこでも敬遠され、箝口令の代りに、役付きにされるものだが、世間というものは、小利口な人がリ

ドする。つまりそうした人達には都合の悪いことを口走りそうで、警戒するのだが、必ずしも思惑通りにいくとは限らぬ。

この句は、よっぽどのうるさ型であろう。満場の拍手が聞こえそうな句である。

いっお逢いしても雨蛙君ひとり

(きさ子)

からだに似合わず大きな声で啼く雨蛙。一と雨くるやいなやすかさず啼きだす雨蛙。あつちからも、こつちからも、喧びすなく啼き立てる雨蛙。ほんとうに雨蛙は特異な存在だ。地球のある限り、雨さえ降れば自分が降らしてでもいるかのように啼く雨蛙は好きだ。

青葉ときから、夏にかけてはよくお目ににかかるが、一と雨きてこの声を聴くと、ビルがうまくなるから不思議だ。ちよこなんと、青葉の先きにへばり付いているのも愛嬌ものだ。表現型式が、変っている。

霧の表情へ山門はなかなかの男振り

(水客)

どの山門とも知れず、山門の威容をまのあたりにみるような句だ。句というものは、十七字の定形がどうの、字余りがいいとか、わるいとか。さては俳句ではどうの、川柳ではどうのと、妄りに論ずべきものではない。

要はその句にあるのだ。この句は、従来の水客さんの持ち味とはちがった巾ひろいものを感じた。とくに「霧の表情」をとらえたあたり、技巧でなく、彼れの詩のうの豊かさをかんじた。

育児法とおりですこし軽い孫

(日満)

洗練された句だ。普通、祖父の愛情は、父母の愛情ともちがいが、只、孫が可愛くてならぬという愛情のほかに、吾が貴重な体験を通じて得た父親と異った鑑識があるのがふつうの様だ。それは一人や二人の子供ではなく、大勢の子女を育てた人に特有の、するどい眼力があるのだが、両親も、社会の風潮も、表面の目につき易いところしか見ない。この句の「育児法とおりで」には、祖父いチャンの、深い批判があるように思う。

示談屋がむちうち症にしてしまい

(宗太郎)

面白い句だが、此の頃、流行するむちうち症というものは、少し宣伝過剰で「鞭打ち症」になるのは「アカンタレだ」という話を聞いた。

アカンタレというのは、よくよく油断をしていた、気の弱い男のことだ。実際は、フロント硝子に頭をぶつつけ、ロク骨も四五本折り、潮死の重傷を負っても、しっかり者はみんな、奇麗に治っているという。どうもそれは本当らしい。示談屋は、結局、弱味につけ込むわるい氏神様であったのである。

善人の微笑怒りとは見えす

(梁水)

善人とは、能無しの代名詞のようだ。腹が立っても怒りを示さず、女房の尻に敷かれても、よきパパとなろうとする臍甲斐ない人

物。に川柳家はして来た。吾々のイメージには、そうした人物が映るのである。

ところが、この句は、実は腹を立てていると云つてようだ。そうかもしれないのである。腹を立ててはキリがないから、立てぬ。これは極めて常識だ。

日本人は、喜怒哀楽を顔に出さぬと、アメリカ人はヒナンするが、これは、昔からの親譲りである。狡るい奴には、ずるく相手になる計りの話。

水吸うて捨てられていく茶澤かな

(いわを)

見るもの、聞くものが句になる時がある。この句もそうだ。「捨て殻らの茶澤」などというものは、句になると思えないが、こうして作句された「茶澤」は、水の流れに逆らわず、在りし日の、榮華のあとをとどめるかのように。何か茶澤が、人の生涯にも似た感じがするのである。

水を吸うてふくれた茶澤は、思う存分手足をのばし、気持良くせせらぎに流がされていくのであらう。

娘の酌のどこで覚えたいい手つき

(芳仙)

父親というものは、いつまでも子供を子供のままと思ひ勝ちだが、フト見る娘のお酌の手際は、ツボを心得ている。びっくりしたのである。それも道理。時代がちがったのである。娘達には、ミニにはミニの感覚があつ

て、社内旅行などでは、仲居さんに早交りをしてお酌もする。自分でもビールなら平気で呑むのである。愉快な世の中になって来たのを父親は知らない。親バカチャリンだが、これには、これなり親の思い遣りがあるらう。

金ラッシュ金の指輪を一つもち

(魚山)

この頃は、金の指輪も一向値打ちがない。むかしは男物の金指輪には、印鑑などを彫っていたものである。供出の時に出し惜しんで、抽斗の底にころがっていたが、この頃は金の値打ちが出て、べら棒に高値を呼んでいる。しかし、さりとて現金に換えてみる気もない。宝の持ちぐさのような気もするが。

供出した金は、進駐軍にとられたか、盗まれたか、一向役に立たなかつた。今、吾々の手にあつても、果かない思い出をとどめるに過ぎぬ。どこか一本釘のぬけた世の中だ。

ライバルと対決をする猫の背な

(不水)

恋猫を中心に、屋根の上か庭かで、相対した雄猫二匹の、憎しみに満ちた姿態が目につく。猫は魔性のものというだけに、恋をする姿も、真剣そのものである。水を掛けられただけでは退散せぬ。人間の方が辟易して悲鳴を上げるのがオチである。

猫の子を、高い所から地上へ投げおすと、地上すれすれで反転し、ギャフンと参ることなどはしない。こんなことを思わせ、こ

の句は、猫の、魔術師を浮彫りする。

身こもつてこの生涯の重たさよ

(摩耶)

この句の作者は、神秘的な、妊娠という事実を身をもって体験しているようだ。何かしら、清純な氣にうたれる。

作句の傾向もいろいろあるが、こうした全く技巧を加えない、心からの叫びや、うめきの声は、直ちに人の心奥に訴えるものをもっている。これからの川柳が脱皮して行くためには、この句のように、技巧をぬきに、姿勢を正す必要があるらう。

叩かれて叩かれて我人となり

(欣二)

「叩かれて叩かれて」と二つ重ねることにより、どんな苦勞をしたか、凡そ想像がつく。「叩かれ」は世の波風。人になるということは、荒波と、堅く繋がることも自明の理。そうして、人となって、どんなことをしたらいいのだらう。

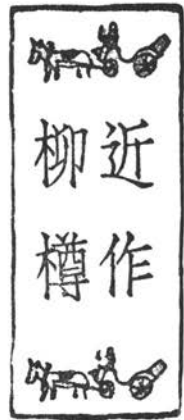
段々と考えて見よう。この句はケレン味がなく、相当の切れ味の良さを秘めている。

秋田 実主宰・不二田一三夫編集

三号にして増刷の人氣ノ

「漫才」 九月号から増ページ

第三種郵便申請中 (送料共) 百四十五円



若 本 多 久 志 選

堺市羽田一扇

宴会の最後を音痴締括り

岐阜市市川鱗魚

プロポーズした日を妻は覚えとり

義妹結婚

ネクタイの縞しか出来ぬ男なり

持てるだけ持たせ裸をわびて嫁り

満員をハンドバッグでガードされ

地下足袋の父へブーツの口答え

夕映の中にまぶしき女立ち

何不満なのか胡瓜のひん曲り

松原市谷垣史好

分り切った知恵を税務署言うてくれ

死体折るように寝椅子を折り畳む

倉敷市藤井春日

満ち足りた朝のレタスの歯ざわりよ

槍となり楯ともなつて子を育て

はずむ恋つい小走りになっている

倒産の予感二号の恐い知恵

小市民の日曜ネクタイ締めて出る

はったりへ部下それほどについて来ず

宣伝カー男の声のむし暑し

カーブーム俸貯金を思いたち

島根県榑原加代

広島県高橋鬼焼

み仏は忌み給うときくバラの花

人妻と距離をたもって暗い道

梅雨前線いつまでつづく妻の上

明日稼ぐ女鏡へ髪をまく

女だから嫉妬だと知るわびしさよ

炎天へ男無言の汗をふく

責任は女にもあり故郷をすて

姫路市 前 田 美巳代

花束を選ぶ主婦幸せには触れず

遠花火不倫の恋の燃えきらず

生ぬるき手に探ぐられてゆく鼓動

清算を迫まる恋あり花ばさみ

京都市 明 嘉 彦

悪魔かも知れぬささやき胸に置く

砂に字を書いてしあわせまだ遠し

芝に寝るころを抱いてくれる空

女に皺を見せて笑っている鏡

鳥取市 有 田 鹿の子

咲いた鉢せめて病夫の窓へおき

暮れる陽がこんなにきれいうれしい日

好きな服今年も出して派手に着る

子がほめる茄子の料理は母仕込み

竹原市 三 宅 不 朽

旅ひとりキップの硬さもわびしかり

京ことば男を遠慮なく使い

ノラの眼もいつしかうせて茄子を漬

妻と掌をしかとそれでも蹴つまずき

羽咋市 三 宅 ろ 亭

脱皮せぬ男時代にさおさせず

アジサイよわが幻想に連なれる

のりきいた浴衣に亭主畏こまり

この子まあカレーライスの味を知り

鳥取県 鈴 木 村 諷子

純情という活き方のたよりなさ

芸者の方が軍歌よう知っている

人間に不信猫を溺愛す

結論から先に言うがという闘志

京都府 福 村 飛 龍

今日も亦氷がうまいと言う暑さ

妻の留守ガスは便利なものと知り

女医さんに似合わずはつきり言ってくれ

夏の夜の湯上り老妻にも魅力

和歌山市 増 田 次 章

進学を出世の道と母はきめ

栄転の道具になって忘れられ

終列車テールランプに冷えた駅

両方が目をそらしてゐる発車前

広島県 岩 谷 二三枝

エプロンに妻の構図の夢があり

この怒り鎮め私に戻りたい

黄昏れて空しくひとり女坂

さりげなく微笑に秘めて憎悪抱く

島根県 志賀 美栄

かけがえの無い妻でありたい日の涙

白百合の吐息を抱いた小糠雨

バイブルに孤独の夜をしがみつ

雨は真珠か水滴の序列

羽曳野市 麻野 幽玄

打水の静けき心人を待つ

群衆の流に委す日の孤独

夢は子へ託し斜陽の土に生き

マンションの裏で蛙が鳴いていた

大阪市 小谷 葉子

母の唄娘の唄虚飾なき波の調べ

粧って恋路は遠く白き砂

おすわりなさい花野の詩招く

カクテルの彩冴え紫の恋はこぶ

大阪市 江城 功雄

野崎観音吟行(二句)

過去現在未来を生きて比翼塚

純愛の由来を語る人は老い

遠慮なく観れる裸を見て戻り

姫路市 大久保 大夢子

梅も漬けらつきよも漬けて恙なし

胡瓜刻む音リズムあり台所

悔も無く望みもなくて虫を聞く

島根県 小砂 白汀

愛されている確信のハイヒール

情性とはかなし花瓶で咲き続け

重力をふり切るように子が逆さ

大阪市 和田 痴亭

道とん堀腐臭ネオンの渦が巻き

六十の孤独万年青の鉢抱かえ

椅子浅くかけて税吏と相対し

東大阪市 坂上山 椒坊

仏壇へ他人に話せぬことを聞き

石を褒め寺の由来を聞き忘れ

娘の化粧デートと知れる紅の色

島根県 石田 清泉

大ぐちをきいた後味噛みしめる

道を説く坊さん都会の匂いがし

おしどりは喧嘩のようにみせかける

島根県 堀江 正朗

ふみ台になる倅せの重み知る

期することあり今日の日を刻む

老僧の力の限り鐘が鳴る

島根県 堀江 芳子

薪木積めば女は富める気にもなり

触れ合うて愛は泉のごとく湧き
大胆に汝は燃えさかる夕焼けよ

守口市 岸 本 豊平次

手離した土地草のまま値上りし
路地の夏お月様が来て風が来ず
病院の屋上寝まきが手をつなぎ

宇都市 櫛 部 いさ夢

植え終えてタバコのうまい雨の中
悪びれず小卒という老社長

ライバルをはめるゆとりも歳と知り

米子市 八 木 千 代

定年の朝も律義な腕時計

ここまでの恋新緑に似てすがし

鍼あんま老いの維持費も高くつき

豊中市 河 本 雪 男

冷房へ働く汗を知らず生き

老醜に似てあじさいが朽ちており

追憶の中に祭のかき氷

八尾市 宮 西 弥 生

夜の空白へ忘却よみがえり

約束は果せぬ握手の赤い爪

割勘の半端へ女まだゆずり

大阪市 堀 口 欣 一

職業は誰も知らない町会長
競輪の資金パチンコで稼ぎ
金の出来ぬ証拠三文判を持ち

大阪市 河内屋 源 七

漫才師高座を下りてからの不遇

アイシャード失業保険貰いに来

質入れに行く夜の臘月夜かな

尼崎市 中 谷 利 美

旧友のもう愛称で呼べぬ地位

昭和元禄全学連の浪士劇

酌の手も慣れて戻ったハネムーン

広島県 南 条 露 声

京詣り入歯へ餞が配られる

去にぎわにやっと切出す金のこと

火葬場がいつち最後の金が必要

鳥取市 藤 本 佳 女

子等の云う話せる母になる努力

貞操をコマギレにして女生き

云い過ぎた悔い抱き締める夜の床

鳥取市 河 口 忠 志

懸命の研究髭ほど伸びて来ず

義理と言う溝の深さを愛で埋め

娘の腕に亡妻の時計がまだ動き

京都市 藤

本 征 山

見栄はった自己満足も鼻につき

八幡浜市 別

宮 す き

よろめきを秘めて女の眼の配り
すれ違いさせてドラマはまだ続き

脚組んで見せる自信のストラックス

田辺市 山

本 貞 伊 知

我まを言わぬ位牌にまた涙
考えがかわりたもの石を捨て
迷い子を叱りお札を云いわすれ

映倫はガラスにうつす帯を解き

この人も同じ迷いの相談欄

台所田村魚菜の味にする

竹原市 森

井 菁 居

粗品選るだけでデパートかけ廻り
女史という男嫌いの名で呼ばれ
税込みを手取りにして言う小さい見栄

職の無い背にチカチカ陽が刺さり

左遷とも知らず転居へ子がはしやぎ

空襲が無い日本の飛行雲

八尾市 高

杉 鬼 遊

勘定となれば親友けちくさい
商談へゴルフと麻雀うまく負け
色っぽい蛇の目で送り夢持たせ

父の日へ子供は義理の贈り物

馬鹿者と叱かれは誰が生んだのよ

色を塗るだけで女が出来上り

河内長野市 森

本 黒 天 子

落選のダルマ次回へしまっとき
簡単にあやまる事も板につき
無理をした中元軽く受け取られ

仲のよさ籠のつがいに取りられそう

新婚の味噌汁やっとう味がつき

地響きを立ててかみなり梅雨があき

姫路市 竹

中 富 多 葉

水平線貴方の名前が消えてゆき
主のめぐみなれど愛の苦しさよ
はしご段登りはじめた声となり

噴水のしぶきが夏へはねかえり

夢枕旅の宿から案じられ

米子市 林

瑞 枝

勉学の目にライバルの灯は消えず

カンナ咲く庭で十九の恋に触れ
嫁ぐ朝父母へ新茶の茶筥ふる

大田市 藤

田 軒太楼

吸い殻をみつめ虚しい待ちぼうけ
雑音が絞った智恵を掻きまはし
朝市へ葱の白さのすがすがし

大阪市 奥

川 継之助

明治百年公害と共に住み
実印の重み四十の指で押し
貧しさを説いて妻の目うつくしい

島根県 山

本 文子

大人になったか新茶の味わかり
スカートを母も短かくして歩き
帯締めをボーナスプランの隅におき

竹原市 時

広 一路

個性むきだして自分の道をゆく
毒舌の二人の中でお楽し
雨雲の上歩けたらなと思ひ

高知県 山

川 勝子

ざあますに齒の浮くような世辞言われ
倅せな時には神もほっとかれ
娘をまねて三毛もしきりに化粧する

新居浜市 村

上 水軍

日紡の選手が並ぶ乳の線
爪染めた手に葱一本露路に消え
夕山の瀬戸の島々音を消し

大洲市 堀

内 曉風

一寸とした傷位なら親の唾
長話しこもあそこも蚊に喰われ
網棚で無事に着いてた忘れもの

大洲市 横

田 放人

過疎地帯螢悠々とんでおり
末っ子は力持ちなり農を継ぐ
裏堀のこけの緑がふとわびし

大阪市 香

川 亜成

怒りの足らぬ若さを反省し
風船のようにフワフワ酔えたなら
腹立てた方から和解求む朝

諫早市 原

田 明春

遺言にヘソクリの場所書いてなし
かあちゃんに済まぬ彼女の夢を見る

新潟県 高

野 不二

瑞穂の国だからお米が余って来
観光地一木一草にこじつける

松原市 守

屋 万竿

支店ではのれんが恥じる味を売り

行楽の帰りは腕に子が重い

尼崎市 平井露芳

小鳥屋に生まれ早起き癖が付き

スマートや云うてやせてるとは言わず

大阪市 河原林比呂路

ラッシュアワーこんなに混んで人不足

どん底の暮らしにもまだ明日を賭け

大阪市 島野 県吉郎

目を細め糸の通らぬ年になり

経机路台にして弥陀を拭き

藤井寺市 古結百水

手土産の要る頼み事女房やり

順番が函へまわって来て年を知り

大阪市 藤田 頂留子

杭全神社夏祭り

高いともいわず祭りの御符売れる

穴の空いた柄杓で水汲むような日々

呉市 榎田 英詩

この辺が折返し点手を見つめ

頼りない子に先代をとくと説き

愛媛県 嶺本 満子

花咲いて寒らぬ恋へ後遺症

商魂は馬鹿になりきる低い腰

宿毛市 瀬田 美知

女房の愚痴をききたくないお酒

茶も水もみな肉となる二重あこ

小松市 四方天 弘美

明日の運勢欄笑って見る自信

メニュー見て無難なラーメンとわ淋し

大阪市 西本 保夫

こっそりと叱る課長の人間味

わる者になって課長を助けとき

鳥取市 小谷 章代

溝もなく平凡銀婚式の父母

過ぎてみて倅せでしたと云える恋

鳥取市 中田 吉春

兄のけんかボチが味方できりがつき

若き日の泪も抱いてる写真帳

鳥取市 山本 珂也女

朝詣で今日の仕事を亡夫に告げ

電報の声に娘の身へさわぐ胸

出雲市 飯塚 全喜知

句を作り句を作り静かな人生路

退院の友の握手に励まされ

鳥取市 藤本 恵子

父の眼はこわいけれどもやはり好き

オコゼ見たわたしでなかったありがたさ

鳥取市 藤 本 和 宏

父の手記虱と言う虫聞いて見た

ゲンコツの下をくぐった舌が出る

鳥取市 藤 本 鎮 也

ほほえんで卒業証書を撫でた母

司会者が一番初めに笑うて見せ

豊岡市 不二本 和 久

焼け趾の雑草の芽に教えられ

預金帳をボツボツ妻は頼り出し

泉佐野市 大 工 千 代

貧すれば次々苦勞がのしかかり

姑になって亡母の心意がわかってき

東大阪市 竹 中 肖 二

御田植の囃子は樟の杜に消え

ミニぬいで今宵祭りの浴衣着る

東大阪市 竹 中 綾 女

タレントに何期待した一票ぞ

たまに来る孫の智恵つき目をみはる

竹原市 生 島 静 波

責任を逃れる時のうまが合い

あわて者だから坐っても居れず

長野県 なかお あ い

コップ酒情にもろい父の味

傷心をいやす故郷の人にふれ

守口市 樋 口 一 峯

瀬に生きて濡るる運命の杜若

女房とは御飯のようなものぞかし

大阪市 岡 本 まさひろ

芸が身を助けてまた身を持ちくずし

食いかねてる拾い屋のデカイ犬

熊本市 岡 本 昭 三

梅雨ばれを待ってましたと耕耘機

たった一度きりの病気に初診料

泉佐野市 大 工 静 子

年よりの愚痴はこぼさず句に残し

六十で親のすべても分つて来

米子市 河 瀬 茂 人

酒を飲む真似はヤッパリ私の子

畳み針のような注射に身をまかせ

香川県 西 山 綾 子

旨かったですよと実は犬にやり

小難でよかったですねとは他人

兵庫県 高 橋 近 江

淡路の旅

口開けてフェリーボートはまだ呑む気

帰る船からも手を振り帽子振り

鳥取県 谷

無 閑

思い出は処女と引きかえした時計
行きつまった時には妻の知恵もかり

和歌山市 ふきあげ

虎 城

つきかねる覚悟を医者が目が笑い
乱れてはいるが女は酔うていず

大阪府 田 中 多 幸

満足は皿までなめる妻の味
ながらえて二人手を取り古稀の旅

西宮市 加 納 聖 司

だんだんに夢が遠くへゆきそうな
理窟では通らぬものと知らされる

岡山市 行 吉 照 路

団交の帰りビールが腹にしみ
強性な頭晩年まで続き

鳥取県 川 崎 秋 女

人様は簡単そうに家を建て
梅ラッキョ漬けて小さな幸に足る

八尾市 高 杉 千 歩

まち呆けしてきた顔とは親知らず
息子受験期

二時間を限る仮寝を起す役

八尾市 高 杉 力

テスト終えはずむ心をスキップに
体育の教師に迫る老年期

石川県 国 分 狂 興

カラーテレビ組立てるだけの職に生き
教養があり読みもせぬ本を買い

岡山県 片 山 雅 子

インクの香のせて朝刊届けられ
人生を刻む振子の音が冴え

高知県 長 田 正 一

人間の弱い心が酒に生き
ある時はカスミと共に消えたい日

相生市 加 波 高 峯

肩書は無いが夫は八十点
二号でもいいわと女手を握り

大阪府 有 信 吐 痴 男

このネオンの電気代も飲まされる
十一時色気は店へ置いて出る

岸和田市 葛 城 一 郎

ABCも知らずパママと呼ばしてる
お向いの夕餉が写るすだれ越し

高槻市 山 田 ス ミ 子

初恋の人にパッタリバスの中

末っ娘は規格はずれの娘に育ち

寝屋川市 福 富 隆 子

茄子胡瓜安く百姓の身にもなり

吹田市 橋 本 幸 男

観光のマークも入れて煙草売り

北九州市 藤 田 独 楽

お見合で親は商談ばかりする

大阪市 半 田 夏 生

披露宴馴れぬ司会の汗を拭き

米子市 源 氏 勝 久

日の丸を出して変屈者にされ

善通寺市 伊 藤 歌 子

早乙女の耳をかすめる選挙戦

鳥取市 近 藤 秋 星

結論を急ぐ女にあるあせり

鳥取市 谷 尾 透 風

耳に栓して置きますと姑すね

鳥取市 中 沢 慎 利 子

アルバムの過去の悲しみ焼き捨てる

鳥取市 絹 川 喜 久 子

値上りの分だけ食費引締める

芦屋市 丸 川 善 男

人ものむ山と云うには静かすぎ

痴 盲 録

高 鷲 亜 鈍

秋骨にふれる思いの杭ほそる
わたしには前も後も同じ姿態
現実には私にとってまっくらけ
手探りで書く執念は因果の字
待たすまを指の爪かむくせとなり
廃品のままで焼き棄てられまいぞ
再製の効かないロスとなった身の
盲人がでると悲劇的になってくる
執念で書く字重なり脱線し
前は面後ろは髪と指がしる

前は面後は髪のかたち知る
抵抗がないので杖のあとをゆく
人間廃業くもやもりと仲間入り
自家用も電話もひけぬままめくら
アイロンの線に躓き叱られる
漬物の石上げ下げを命ぜられ
信心に凝っても冷める性でして
無神論けんかする気に相手せず
失明をしても信心すてぬ氣か
神前へ脛に疵もつ身をさらし

豊臣秀吉 (八)

富士野 鞍馬

秀次

秀次は、秀吉から関白を譲られたが、朝鮮出軍には、辞を構えて出陣せず、素行も悪るかったので、文禄四年(一五九五)高野山へやられた。そしてその七月に自殺した。年二十八。

(天五松一)

(天八満二)

関白を味噌摺にやるむごいこと

川柳もそれを詠んでいる。

(天七・九五)

秀次は、三好一路の子、秀吉の甥で養子となつたが、秀頼が生れてから、秀吉と不和になつたのであつた。

太閤薨

文禄三年(一五九四)には、伏見に桃山城が出来て、秀吉はそれへ移り、慶長三年(一五九八)三月、醍醐の花見を催したが、その

六月、六十三歳を最後としてなくなった。それで朝鮮軍も引揚げたのである。

(九六二)

もも山の花見お顔によく似合い
臨終に、徳川家康と前田利家に後事を託したので

猿末期犬と虎とに子を託し

(二〇一六)

猿の臨終枕辺に寅と犬

(二五三二)

利家の幼名犬千代で「犬」と作られ、家康は寅年生れで虎といわれていた。

秀吉の辞世は、

露とおき露と消えぬるわが身かな

なにはの事は夢のまた夢

というのであつた。そして正一位を贈られ、京都に豊国神社として祀られている。

上がつたり大明神豊国也

(傍三二)

後継の幼ない秀頼は、翌四年正月、母淀君と共に大阪城に移った。家康は暫時政権を預り、桃山城に居た。

ところが、関ヶ原合戦となり、大阪冬、夏

の陣で、ついに豊臣は亡び、徳川家康の天下となつたのである。

永き代を猿骨折って寅がとり (二〇〇五)

申は暮れ寅は日の出の御威勢 (二四四三)

猿の尾は短し虎の尾は長し (七八二)

と川柳は最後まで秀吉を猿として詠んでいる。

関ヶ原合戦

秀吉の死後、家康の勢力は増大し、大阪の秀頼との対立も激越になった。ここにおいて秀吉恩顧の石田三成は、会津の上杉景勝と同盟して、家康を狭撃しようと企てた。

家康は伏見に居たが、鳥居元忠をとどめて東下し、景勝を伐った。ところが伏見城は、石田三成に落された。

そこで家康は兵をかえして、三成軍と美濃の関ヶ原で会戦した。時は慶長五年(一六〇〇)九月十五日であつた。この時全国の大名は、大体美濃を境として二つに分かれ、東は多く家康につき、西は三成に味方し、双方約八万の兵であつた。ところが西軍の小早川秀秋が、家康方についたため、西軍の敗戦となつたのである。

尻の方から崩れるが関ヶ原 (天五九一)

石田詰尻から金吾中納言 (五三三九)

石田くずれせつつちんづめになり (安四九二)

尻からは金吾石田の破れ口 (一二六八)

小早川秀秋は金吾中納言といたので、将棋の「金」として川柳に作られている。

関ヶ原すてっぺんから押基なり (四三二)

千なつてさへいけないに三ツなり (安八智一)

虎の威を三成すでに呑むところ (四九四)

虎の尾を踏んだが石田百年目 (五一二六)

私のメモから

吉田水車

◎柳翁の選句スピードは

柳翁の選者としての最も盛大であった明和年間の前句附(川柳の母体となった)の応募句数の最高が一万二千四百九十句で入選したものは三百四十三句と言うからその率は三パーセントである。所で柳翁の選者生活三十三年間に残された句数はすべて八万余句に上っているがその採択率は三パーセントが不変であったようであるところからこれを逆算して応募句数を出すと実に応募総数は二百七十万句と言う龐大なものとなる、これを三十三年で割ると年間八万句一月当り(前句附の募集は毎年八月から十二月までに行われた)一万六千四百句、一日にすると五百五十句で、かりに不眠不休で選句した場合一時間に二十三句(一日十二時間としても四十六句)の割合になる。

以上は単なる計算上平均した話して、選者を専業の言わば職業であつてみれば右の句数は大したものではないようであるが、

石に判押した手合はみんな逃げ (五四一六)

草も木も東へなびく関ヶ原 (五八三)

きぐすりやせんじつめたは関ヶ原 (三八一)

等と、三成の敗戦を詠まれている。

その後の天下の実権は家康の手にうつり、三年後の慶長八年(一六〇三)家康は、征夷

前句附の性質上課題に当る「前句」の意味は広汎多岐に涉り、殊に詠史の場合には当然に古事記、日本書紀、漢書、能、謡曲、教典、歌舞伎等からの利用取材を内容としたものがあつたから句の判定には余程のうんちくがないと正確を欠くうらみがあるから熟読吟味、公正妥当を期した柳翁の選句態度から推せば上記の句数は必ずしもすくない数ではないだろう。時によっては関係文献の渉獵も必要であるから一句の玩味に当つては相当の時間が必要ことになるので如何に選者が博学堪能にしても、町名主の公職にあつた柳翁にしてみればその方の仕事事が会期中にでも、なかつた訳ではなく、又身辺の鎖事もあつたことと毎月五日の日々切であつたけれども入選句の印刷には今日とは違い相当の時間がかつたこと等々を考え合せると選句の時間にはおそろしく徹夜のことであつたのではなからうか。

大いに腹を減らすべし

ある芸能人との対談の中で「一生懸命歌うので、お腹が減る」と答えている。相手ははたちになるかならないかの女性歌手で

大將軍に任ぜられ、江戸に幕府を開いたのである。慶長十年(一六〇五)には、將軍職を秀忠に譲り、家康は御所として静岡に隠居した。

★

▼和田痴亭氏の電話番号六七三・六〇六六番

ある、勿論どんな芸能にでもそれ位の心構えと精進はしている筈であるがこでは一例として歌手を挙げたに過ぎない、そこでおもうのは一寸のどがよかつたり小器用さだけでコンクールのステージに立つてもなかなかパスしないのはつまりは腹を減らす程の努力が足りないか天分に恵まれてないかであらう。

川柳にしても他の作品に刺激されて衝動的に作つてみても所詮付け焼刃でどうにもならない、天分と言っても幸い川柳は再演芸術ではないので必ずしもその要はない、意欲さえあれば作つて作れるものである。ただしし課題の如く大いに腹を減らす覚悟だけはしていただきたい、私自身も作つたあとで空腹を感じたかそれより前に腹を減らすかの修業をもっともつと重ねたいとおもっている。腹を減らした作品とそうでないものとでは一応五七五には成つていても実に気はすかしいものとなる。歌で言うなら声量に加えて張りが何とも言い得ぬ小節の調子が聴き手を魅了し去る。先輩達人の句をみるときにこの感が深いのである

にんげん

戸田古方

『追いついたブーツコツコツコツコツコツ』

三月の句会の句ですが、全くの実感。この二、三年、膝や足の具合が悪く、歩き辛うなつてエッチラヨッチラ。エッチラヨッチラでは誰にだって抜かれつ放し。若い元気な人はいいなあと羨むばかりです。その足が、今年の二月、八〇キロもあるお前みたいな重いのを運ぶのはもうご免だとばかりストを起してしまいました。一週間ほど、文字通り四つん這いが精一杯。二本ですむ足を四本も使わないと動けないとはと、ほんとに情ないことです。

人間の文明は直立にはじまると歴史は教えています。道具をつかう手、大きな頭脳、複雑に喋れる舌がもてるようになり、火の利用へと進みました。そして、人間は万物の霊長だと自らいうのですが、しかし、そうになったことが、人間をどれだけ幸にしたか。話は別になつてきそうです。

生れるなり、二本の足で立たれたのは誕生

仏のおシヤカさまだけ。普通の人間は生れて一年ぐらいいないと、二本の足で立てません。勿論、誕生仏の立ち姿はシンボルでありましょう。では、何のシンボルって。世の中を正しく見るために、といわれています。

それでは、正しく見るってどういうことでしょうか。世の中の多くの人は、自分のすることは何でも、これが当り前、これが正しいとばかりきめてかかりたがります。だが、その中にずい分スカタンなことがあるのです。スカタンのくせにスカタンと気がつかない、そんなところに、もろもろの不幸の原因があるのではないかと思うのです。

浄土真宗親鸞聖人の教えの真髓を伝える「歎異抄」という本があります。「歎異抄」は七百年前、親鸞聖人の没後間もなく、その遺弟によつて書かれたものですが、明治になるまで、宗門では門外不出の書として公開されてませんでした。その理由は、この中には、世間常識から見ると、非人情というか、常識はずれと思われるようなものを数々含んでいるからで、求道者以外のものが、勝手に読んで勝手に解釈しては危険な書物となるというのです。

ところで「歎異抄」は活字になって僅か六十年しかたっていないませんが、大変な人気で、岩波の文庫本なども、今だに増版を続けているというのです。正に「いのちある」本というのでしょうか。

「善人なをもて往生をとぐ、いわんや悪人おや」

とか、

「よき人の仰をかふむりて、信ずるほかに別の子細なきなり」

とか。現代人にとって一服の清涼剤と申しますか、既成の思想に行き詰り、真の救いに憧れ、愛の極致とは何かを考える人々にして、はじめて理解できるものをもっています。

愛と業、業とは人間一切の行動をいうのでしょうが、どう考えても、善であるとか安心しきれない私たちの心、その心の性を悪と観じ善悪を超えて、信ずることだけを手づるとして、やつと目を開くことのできる愛、そこに最後の落付き、幸せを見出そうとしているのが歎異抄の世界です。

人間の本性、業に苦しむわれらの姿を、無慈悲なまでに見せてくれている本があります。最近、耽読している一冊、岩波版「太平洋戦争」家永三郎先生著がそれでありました。

この「太平洋戦争」は「戦争はどのようにして阻止できなかったか」と「戦争はどのようにに進められ、どのような結果をもたらしただか」の二編にわけられています。つまりは現代版「平家物語」とでもいいますか、驕れるものの亡ぶる過程、どうにもならない業を感じずに読み下せません。第一篇では一切の批判の余地が鎖され、為政者の暴走を止める全てのブレーキが為政者自らの手でプチ壊されるところからはじまっています。

「役人は一寸喋るに供をつれ」

という私の句があったために、その一枚を削除されて、川柳雑誌奉還号が出たことを思

い出します。昭和十八年のことでしたか。社会批判、人生批判を「いのち」とする川柳がよくもここまで残ったものだと思うと同時に、路郎先生が、戦争以来みんなの句が荒れた、拙くなったといっておられたのを思い出します。旨い句は作っても発表できなかったのでしょうか。それとも、当時の国策とやらに飼育され切っていたとでもいうのでしょうか。

人生はギブ・アンド・テイク。そのギブが、ちっともされずに、テイクにつぐテイク、大東亜共栄圏も偽りなら、欧米支配からアジア諸民族を解放するというのも美名、売名。遠いビルマやインドの独立より、何故近い台湾や朝鮮の独立を考えなかったのだ、また、日

本自身を王道楽土になるようにもつてもゆけないのに、何が五族協和、王道楽土の満洲国だとの本はいつています。日本を解放軍、救世主とあがめ、憧れ、やがて失望し、抗日に浮身をやつている間に、今日の独立の土地を作ったとも書いてありました。日本自身にとつても、間違つた日本から、民主主義の正しい日本になるための脱皮、つまり、太平洋戦争の結果はそういう意味では、所謂「神風」であつたような気もするのです。

これは、お薦めしたい本だと思ひながら読み続けました。読みながら、読み進むのが辛らくなるほど、心の芯に響いてきます。或はこの醜さをお互いに持ち合しているのではな

雅号ぶっちゃけばなし (43)

りよくのすけ



尼 緑之助

あ
ま

私の少年の日、テーエンジャー、地方新聞の柳壇に興味を覚えていたので、近隣の少年を集めて作句ごっこにはおもしろい玩具だ、くらいの興味から始まる。高松村の住人だったので、高松緑之介(みどりのすけ)と名乗った。本名は伊藤忠三。

昭和二年川柳雑誌を手にするに及んで川柳開眼、故路郎先生の許に川柳一週に走り出したわけ。勿論、文学少年の夢青白く、川柳軽視(式は無視)の生意気な時代だった。さてここで、伊藤緑之助(りよくのすけ)に変わり、後、尼家に入り現在の名になったわけ、尚、尼子氏の末裔かとよく聞かれるが、さにあらず、維新の戸籍改編の際誤って屋号の「あまや」が変化したという次第です。

いかと自省、批判することが作句の糧になるとも思われるからなのです。

歎異抄の歎異は排異でも、異との妥協でもありません。信仰上の異説を唱えずにいられたなかつた悲しい業をもつわれら、そうでもあらうと、供に手をとり、ともに涙している姿なのです。丁度、四つん這の最中、私の思つた思ひの終点もどうやらそのへんであつたようでした。

★

読書の秋が近づきます。

若本多久志著「老いの坂」「親心子」ころ」

橘高薫風著「れもん」

麻生路郎著「新川柳鑑賞」

高鷲亜鈍著「詩川柳考」

直原玉青著「新しい南画と俳画の描き方」

何を選んでいただくかは先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも 心に
くい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



なんば
日本橋
大阪・東京・京都

高島屋

初歩教室

題 「雨」

菊沢小松園

雨と言う一見単純な題からも実に色々な句の材料のあることに驚かされる。時と境遇、場所と感情、見方も扱ひ方も各人多様で教えられる事も多い面白いものである。

ずぶ濡れのピチピチジャブジャブ叱られる

雨蛙波紋を眺め乍ら鳴き

長雨の茶の間で孫へ鶴を折り

雨降ってゴム長のいる土地と知り

再会の傘の雫をかい合い

露声 秋月 瑞枝 弘生 初甫

①子供動作の表現方法にこの句のよさがある、無邪気な幼児語を効果的に使ってよい句になった。②この雨蛙を人間に置き変えて見ると、いま時の若者のようにながら族の姿とも見えて面白い思った、併しこれは思い過ぎの見当違いかも知れない。③これも巧者なこの人にしては低調、句も平凡の境を出まい。

④ゴム長の要るは良かった、この表現によつてこの土地の様子、四辺の情景まで髣髴と

する。動かないピタリした句語を撰ぶことの重要性を教えているような句だ、余韻のある佳品。⑤人間味のある句、川柳の持つ良さを強調して居る下五の表現は完全に近しさうに老練、この欄の人では無い。

留守番が笑った通りの雨になり

また雨が降ってきました長電話

俄か雨傘貸したのを思い出し

ほどほどに降って慈雨だと拝まれる

降りそそぎダムは神秘をとりもどし

①家を出る時留守番に冷やかされた通りに雨になった、旅先で微笑んでその言葉思い出しての幸せな当人達も想像されて面白い。

②またが実によく利いて女の長電話の時間的な経過も現われて行き届いた舒法になった。

③事があつてふと思ひ出す。雨が降つて来たので貸した傘を思い出したのである、借りた方は忘れて居るのである。彼等の対照の違いもある面白い。④上五の出だして生きた句

何事も程度の問題で感謝しだれ怨まれもする

⑤満々と水があつてこそ幽玄さもある、早上ったダムは寧ろ滑稽でさへある。

淋しさが雨の障子を開けさせる

雨よふれ降れお玉杓子が背伸びする静観堂

その日雨とは心に書く日記

俄雨他人の傘へ素直なり

雨風は二百十日と思ひ込み

①心の淋しさが雨の日のこと更らに増す障子を開けるただそれだけ動作にも句の持つ寂しさを頼る程度想像さす表現に印象に残る句

②心の淋しさが雨の日のこと更らに増す障子を開けるただそれだけ動作にも句の持つ寂しさを頼る程度想像さす表現に印象に残る句

③心の淋しさが雨の日のこと更らに増す障子を開けるただそれだけ動作にも句の持つ寂しさを頼る程度想像さす表現に印象に残る句

④心の淋しさが雨の日のこと更らに増す障子を開けるただそれだけ動作にも句の持つ寂しさを頼る程度想像さす表現に印象に残る句

⑤心の淋しさが雨の日のこと更らに増す障子を開けるただそれだけ動作にも句の持つ寂しさを頼る程度想像さす表現に印象に残る句

⑥心の淋しさが雨の日のこと更らに増す障子を開けるただそれだけ動作にも句の持つ寂しさを頼る程度想像さす表現に印象に残る句

⑦心の淋しさが雨の日のこと更らに増す障子を開けるただそれだけ動作にも句の持つ寂しさを頼る程度想像さす表現に印象に残る句

⑧心の淋しさが雨の日のこと更らに増す障子を開けるただそれだけ動作にも句の持つ寂しさを頼る程度想像さす表現に印象に残る句

⑨心の淋しさが雨の日のこと更らに増す障子を開けるただそれだけ動作にも句の持つ寂しさを頼る程度想像さす表現に印象に残る句

⑩心の淋しさが雨の日のこと更らに増す障子を開けるただそれだけ動作にも句の持つ寂しさを頼る程度想像さす表現に印象に残る句

になった。③これも作者の心境でこの句に説明はナンセンスであろう。内容の味に触れればいいのさう。

④繊細な女心がこの格調の高い句を生んだ、雨のその日に何事があったのか内容の深さにまで引き附けられる、佳句。

⑤ありふれた情景を一句にしたのは下五の適切な表現にある、句語大事さを示したよい例句としたい。

⑥明治生れの頑固さは厄日は必ず荒れるものと信んじ切っているのを皮肉ったのだから句材が古い。

梅雨晴れへ着せる服までマ脱がせ

梅雨晴れへ隣と競うほどに干し

気残りがする立読みへ雨は止み

雨宿り善意が今の妻となり

①句に現われただけの意味より後に残るものがない句は弱い、一応句になつては居ても梅雨時の母親忙しい一面を詠んだだけで内容のありふれて余韻がない。②これも規い所だがこの方はまだ下五に救われ、感じ方に世情との縫りがある。③本屋へ都合よく雨宿りした本好きの心理が上五でよく表現されていて面白い。④この種の句も多かったそれだけに余程の掘下げがないと損なことになる。⑤善意の内容は知らぬがよい句語を用いられたもの、これで一句が生きた。

夕立に仏の慈悲の地蔵堂

選挙戦ずんでポスター雨ざらし

俄か雨マの迎えに手を叩き

軒先でひどい雨ねとうれしそ

①夕立に眺え向きの地蔵堂がある、仏の慈

アイ子

とみ子

正朗

頂留子

万竿

万竿

万竿

万竿

万竿

万竿

万竿

万竿

万竿

万竿

万竿

万竿

悲に触れたというのである膳立てが良過ぎてやや芝居が多い様に思われるが面白い。②落選候補のポスターであろう、結果悪ければみな悪く違犯候補も多くの場合落選組から出る。③これは幼稚園か、無邪気さは出ているが内容の浅さが難。④喫茶店で雨宿り、なかなか止まずコーヒも二杯とただそれだけで印象は浅い、もっと突込んだ句を貴女なら作れる筈だ。⑤交際のまだ浅い二人、雨宿りもまた思い出を増すものであろう。よく判るがも

川柳さいたま創刊百号記念

「さいたま同人・百人句集」

菊版横綴一〇六ページ・タイプ美麗版・限定三〇〇部・埼玉川柳社の総力をここに結集ノ希望者は二五〇円封入して浦江市常盤七十五―十二。埼玉川柳社

昭和四十三年

「国鉄川柳句集」

定価・二五〇円・送料・五〇円

発行所 横浜市保土ヶ谷区岩崎町四三・

国鉄アパートG棟の十一

全国鉄川柳人連盟

市制十周年記念

九月一日―第十二回近県川柳大会

弓削川柳社創立20周年記念

と何かいい句語がありそうに思える。

長雨におののく土手をパトロール 誓二

雨乞いが利いて今度は降り過ぎる 弘美

氣象台信んじない同土雨に逢い 鉄舟

お隣りのトタンに雨を知らされる 秋女

新調へ宿命という雨が降り 吐痴男

①増水の堤防をパトロールの警笛が緊迫を告げる、その後続く救いの手を望むのは無理なのだろうが、人間味に触れる余情がほしかった様に思うが、②人間の気儘さ御都合主

九月八日―第二十回西日本川柳大会

九月二十二日―第四回大陸柳人同窓会

▼富柳会（富田林市）は七月二十日紀の川苑で徹夜句会開催。清水白柳氏を囲んで盛會。

▼ささやま句会は八月十八日、篠山デカンショ祭りの当日なので句会を早く切りあげデカンショ祭りを観賞。

▼三対二の旅―八月八日、鷺羽から―三夫氏宛に寄せ書き。

三対二鷺羽の夜も無事に明け
ご一緒に来てみたかった鷺羽山
磯の香を活字に入れたい鷺羽山
鷺羽山何処を撮っても海がある
楽しい一泊二日の旅でした。

好 弥 葉 薫 奈
郎 生 子 風 々

義に作者は眼を向けているのだらうが常套に過ぎて損な句。③これもあまりに詠み古された処、日常茶飯時は妙手を出して引き附けなければ訴えるのは少ない。④この句も同じこと、同趣好の句は少なすぎたがトタン屋根に救われて干し物を濡らさずに済んだ様な人間味に触れる方がよい様に思うが、要は寧ろ感謝の意を現わしたい。⑤背広と見た中七と一句の意義を出している、これも句語の選み方のよい例を出している。

雨三日ぼちぼち愚痴る顔がふえ 比呂路

雨二日そろそろ人に嫌がられ 秋女

①②同好の句取れば①だらう。ぼちぼちの前提が日旱り続きに雨を望んで居た顔があり三日も降ればもう人間の勝手はぼちぼちと言うことになる、内容やや優るか。

自動車のね傘でよけ雨の中 政夫

雨だれの音へ隠居の新聞番 徹也

①②誰しも思い附く常套の情景は人を引き附ける句になり難い。もっと突込んだ句材を詠んでほしい。もう少し工風して作って見下さい。

晴耕雨読むかしは楽に食べてゆけ 選者吟

どしゃ降り声を掛けて行く馴染客 同

九月二十日締切十一月号発表

「言葉」

宛先 大阪市阿倍野区王子町四丁目2番22号
菊沢小松園

ラッシユ

村上旭童選

ラッシユラッシユ車買つてもな^な
ラッシユ避けて街路樹美しい
しらずとラッシユの街を霊柩車
押し屋すら押されて乗った朝の駅
ラッシユアワー女と思えない女
会う人に会つて安心するラッシユ
ラッシユにも馴れて揺る^も身委せ
定期代上げても解消せぬラッシユ
朝のラッシユ又ライバルと向い^あ
立ち飲^みミルクが腹で鳴るラッシユ
ラッシユ時さけ一杯が終電車
都会から逃れた山もカーラッシユ
ラッシユアワーお久し振^り尻を向^む
ラッシユアワー目と目が合図を^あ
工場が田舎へラッシユつれてきた
カーラッシユ自転車組が先につき
セールス^のラッシユを乗りこなし
病^をとラッシユアワーを恋しがり
退け時のラッシユを避^き母を訪^い
しつかりと財布へ武装^すラッシユ
ラッシユアワー^あおつさ^の声が^{きこ}

露佳鎮礎弘恵とみ柳梁初政宵無同肖二公不二丸
声女也山朗二期子水甫夫明閑二二輔太郎明

駅前^のラッシユ他人の怒気にふれ
ラッシユ時さけて出歩く老いに^き
通勤のラッシユに痴漢めくスリル
ラッシユ^を抜^き取り出^しコンバクト
ラッシユ^を持ち場^へ持^ち場^へ拘^わ摸^し飛^び
退社ベルラッシユの街へ追い出^し
ラッシユアワー離^れ手をつなぎ
綱張^つてもう^じラッシユアワーです
定年までラッシユに体もつだろか
ラッシユ時を避けた時間を疑われ
特売のラッシユ承知で買^う若さ
天国も満員急げカーラッシユ
ラッシユにも馴れて都会の風^に染^み
ラッシユ^をラッシユ俺も痴漢^{にな}
人々マンモス都市の朝ゆらぐ
カーラッシユ新車も中古も列に^つ
駅長も助役もラッシユへ勢ぞろい
ラッシユ^を抜^き出して女をとりもど^し
降りる時を考^え押し屋に挑^戦
ラッシユアワー過ぎてめし屋^に
ラッシユアワーの中で告白^も度胸^も

旭峰古心利美秋月春日同曉風古方素身郎無聖白汀代仕男百水軒太樓英詩秋月芳子豐平次芳仙七面山勝久富多葉里風秋女木魚

人 猛烈なラッシユの中の一人はち 一雲
地 処置なしの顔で駅長たつラッシユ 十九平
天 ラッシユアワーたくましい子に支^もれ 正朗
軸 ラッシユなど知らずに父の来^もたり

少女 少女
菱田満秋選

ママゴトのママはおしやまな口^を
振り向きも出来ず少女の恋心
少女フット或る日の父をきたながり
天国の恋へ少女のあこがれる
外出の少女制服着たがらず
少女も家の貧乏鼻につき
花束を贈る少女に親の見栄
ヅカ娘あだ名で呼んで得意がり
ギョツとする告白少女の日記帳
サイン帖宝のように持つ少女
少女も母を困らすことを聞き
母となる夢あり少女病みつづけ
その中で少女一人が席ゆずり

弘生百酒秋女同英詩保夫秋月初甫里風不二千翁いさ夢

茶話へ少女のおませ叱られる
 たくましい少女へ明治目を廻し
 恋知った日から少女に要らぬ親
 ハレンチなこともセーラー云々
 悔しさに耐える少女は爪を噛み
 おませから文学少女出来上り
 君と呼び少女息子の部屋に来る
 小説を地で行く夢をもつ少女
 へらず口たたく少女の瞳がきれい
 少女抱いてやれば干草のにおい
 見も知らぬ少女貝殻くれて行き
 罐壇へ少女の夢の育つ春
 ふえて来たニキビ少女をてこず
 マンションで暮し素顔はまだ少女
 次々とテレビおませな少女出し
 シンデレラ姫を慕うて病む少女
 このへんがまだスカタンな少女
 むかしなら不良少女だ現代っ娘
 グループで祈る少女の千羽鶴
 先生を美化して少女恋かしら
 買物が上手少女に母がない
 いつまでも世間少女にしておかず
 虹の橋を渡って行った少女の詩
 暗着きた少女へ日本のよさを知る

芳子 正朗 史朗 芳仙 素身郎 道雄 葵水 利美 露声 百水 磯山 和宏 佳女 宗太郎 綾女 宵明 古方 雅城 里風 梁水 素身郎 宵明 七面山 軸

皿

青木遊星選

目を皿にして捜して落し物
 皿に載る味覚へハエの無表情
 灰皿はみんな呑屋の名ばかり
 皿一つかえて病人箸をとり
 一人者佃煮だけの皿で足り
 美しい皿へ食慾そそられる
 それぞれに情緒もつ皿瀬戸九谷
 大家族皿を旅館のように出し
 御自慢の画皿の光る応接間
 手のひらを灰皿にして老農夫
 灰皿を片手に掃除の部屋追われ
 又割れる皿だと安い方を買
 皿一つ趣味の深さを添えて出し
 飾り皿子沢山には場所が無い
 ちくはぐの皿もまじり目出度い日
 菓子皿のお菓子に未練おいて去に
 灰皿はゆうべのままの桃の種
 料理屋の皿へカマボコかしこまり
 皿だけで済んでよかった痴話げ
 炊事場の皿の音から明け始め
 一枚の皿柿右衛門は命がけ

章雅 公輔 雅城 トク子 無閑 秋女 勝久 公輔 弘朗 恵二朗 軒太楼 佳女 無聖 隆子 露声 七面山 初甫 宗太郎 利美 和久 十九平

灰皿も要らぬお客へ肩がこり
 大皿に小鯛がポーズとる祝
 過去遠く皿を洗った立志伝
 灰皿は山団交は夜を徹す
 キャベツばかり多いランチの皿
 皿だけが大きいバーのオールドブル
 どの皿に盛ろうか好きな人がくる
 継ぎ足してみたが悔いだけ残る皿
 同じ皿拭いてる母のもの思い
 愛情を料理に込めて盛った皿
 エプロンで隠くすお隣までの皿
 灰皿へ生活のゆとり見せて去り
 灰皿が溜り意見のまだ合わず
 腕前が皿を見事に格づける
 まだ少したべたい皿を持つてかれ
 灰皿が一ぱいになる哀しい日
 皿叩くりズムおけさが酔うている
 皿もよし盛り方もよし味もよし
 溢れても受皿のある縄のれん
 不器用なナイフへ皿が耐えてやり
 天高く絵皿へ秋の色を溶き
 庖丁のさえ皿模様が生きている

梁水 柳子 白汀 十九平 素身郎 政夫 里風 秋月 綾子 阿也女 宵明 宗太郎 史朗 柳子 みのる 雅子 千翁 藤波 吐痴男 梁水 芳仙 軸

第二百六回（復活第十一回）

大 萬 川 柳

「剃 刀」

入選発表

選者 清水白柳

投句総数 五百五十五句
入選 六十二句

喋ってる口剃刀に封じられ

堺 草春

剃刀を嫌がる口へ補乳瓶

大阪 頂留子

剃刀に無我の境なり湯のけむり

大阪 小路

頑固さが日本剃刀からわかり

羽曳野 吐来

剃刀の替刃も錆びて病んで

富田林 きはち

肩流しついでに襟足剃ってくれ

倉敷 梁水

剃刀を研ぐ間が長い蒸しタオル

守口 笑風

剃刀で切り張り子等は伸びざかり

西宮 百酒

心機一転剃刀あてて今日も出る

笠岡 白梅子

剃刀を当てれば動く咽喉仏

岸和田 千舟

剃刀ともいわれ汚ないとも云われ

倉敷 柳子

手術前看護婦きれいに剃ってくれ

門真 鉄児

剃刀を女が持てば出る凄味

宝塚 無聖

顔剃りにあなたまかせの眼をより

尼崎 慶彦

出張の明け暮れ車中で髭を剃り

倉敷 素身郎

新型の剃刀当分まめに剃り

大阪 鉄舟

剃刀持ったまテレビはホームラン

広島 露声

剃刀があるにと気になる不精ひげ

鳥取 礎山

かみそりで帳簿いじって見付けられ

宝塚 ゆきを

かみそりを借れば勘定にチャクと入り

大阪 万竿

湯につかりひげ剃る顔に陽が当り

八代 史朗

剃刀を持つ手時計とかけくらべ

大阪 柳志

むしタオル顔にあすけて研ぎうけ

大阪 水客

剃刀を研いで話がまだつづき

剃刀をとめ襟足を見ていたり

剃り残すのは剃刀のせいだなし

米子 千代

剃刀も入れてキャンプの荷をよめ

高石 好郎

店閉めて剃刀を研ぐ弟子ひとり

高石 好郎

剃刀の替刃にも似た椅子異動

高石 好郎

脱稿へやっと剃刀当てる朝

高石 好郎

借りにゆく口実剃刀当てながら

高石 好郎

スリ道具になるとは剃刀知らなんだ

高石 好郎

独乙製弟子を試しに剃ってみる

高石 好郎

剃刀もふも毛みたいへせいがなし

高石 好郎

インターンの剃刀観念の目をうり

高石 好郎

剃刀の末路は下駄の髭を剃り

高石 好郎

夜店では剃刀見事に切れていた

高石 好郎

佳句

大阪 楽々

剃刀を研ぎ研ぎ無心聞いてやり

堺 青香

剃刀と云われ孤独に耐えて

富田林 花梢

剃刀へママはいちいち口を出し

笠岡 忠三

剃刀の傷だというにからかわれ

岡山 久米雄

よく切れる剃刀はあり不精ひげ

人ノ句

藤井寺 吸江

剃刀が喉にあるのにあくびされ

地ノ句

堀 一舟

肝腎のかみそり止めて釣り自慢

天ノ句

岸和田 千舟

剃刀が散らばっている仕舞風呂

大萬ベストテン (八月現在)

(同点ノ場合ハ投句先着順)

一、素身郎 二一・〇 倉敷

二、文秋

二一・〇 大阪

三、柳志

一九・五 大阪

四、好郎

一七・〇 高石

五、吸江

一五・五 藤井寺

六、弓彦

一五・〇 大阪

七、ゆきを

一四・五 大阪

八、水客

一三・五 高槻

九、静馬

一二・五 米子

十、千代

一二・五 尼崎

十一、慶彦

二一 梁水

十二、日満

一二・〇 鳥取

十三、美房

一一・五 大阪

十四、十九平

一一・〇 岡山

十五、阿茶

一〇・五 大阪

十六、清路

一〇・五 大阪

十七、小舟

一〇・五 大阪

十八、静波

一〇・〇 岡山

十九、久米雄

一〇・〇 倉敷

二十、梁水

二一 川村好郎

二二 きさ子

一〇・〇 岸和田

第十三回「抗議」五句以内

締切 九月二十日

第十四回「不良」五句以内

締切 十月二十日

投句先

大阪府高石市高師浜三丁目五

十六 郵便番号五九二

川村好郎

句集

「燎原」

橘 高 薫 風

て来た果実である。

まこと燎原とはよき名である。

燎原の炎の如く、十一人の騎士たち

ちは、あかあかと進む。」

とある。

剃刀のすすしさを信じない

静夢

札東へ君手袋を脱ぎ給え 栄十

嫁ぐ日の門にわが家の空が有り

茂夫

なにもかもゆづり故郷に墓一基

不折

水底のわたしを消さう石を投げ

天樹

飛行機で来てスタジオで駕籠に乗り

金之助

悪銭のぬくもりがある襟を立て

吸いがらの口紅嘘を積み重ね

峰代

ご利用ください

川柳塔柳箋

一冊65円、送料35円



マチカワペン

優雅な書き味

所題時	玉造川柳会
九月十日(火)午後六時	
本部・ひどい・故人	
玉造交差点南一〇〇米	
大阪信用金庫	
所題時	南大阪川柳会
九月二十日(金)午後六時	
野生・決心・ロビー・	
静けさ	
北生野町二丁目乗願寺	
国分町東三〇〇米	

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橘高薫風・担当)

▼中島生々庵主幹は八月七日、和歌山七面短詩型文学クラブへ清水白柳氏と同道。主幹の柳話はどこでも評判がよいとのこと。

▼麻生霞乃先生は、すっかりお元氣になられて、毎週一度は大阪へ出て、お孫さんに英会話の初歩を指導しておられる。「働き蜂の帰るラッシュ」は遠慮する。沿線は茂みにのぞく灯もあつて」

▼第十七回東北川柳大会は十月十三日午前十時から仙台市役所前仙台信用金庫七階大ホールで開催。兼題は「ぞろぞろ・塵・失う・乾く・回り道・指・王様・化粧・あしあと」。投句は百五十円封入の上、十月五日まで

淵、伊勢商工会議所内三重川柳協会宛。

▼川柳えんびつ社新発足川柳大会は八月四日午後一時から高岡市長江温泉で。

▼第十二回広島平和祭川柳大会は八月十一日午前十時から広島市三篠公民館で。

▼吉田機司忌川柳大会は七月二十一日午後一時から船橋公民館で。

▼第五回垂天賞(川柳人)に左記の句が受賞と決定した。十字架を昇る泥人形の笛の音―曲線立歩。

▼関西川柳懇話会は八月四日午後二時から瀬田川の網舟を楽しみ、石山の船岩で会食歓談した。本社から清水白柳氏と薫風が出席。

▼備前川柳社うどん祭句会(七月十三日浜田久米雄居、中京川柳社史出版記念、併斎藤旭映喜寿祝賀句会、ひらなない句会(七月七日徹亭居)、一杯水例会(七月二十一日下関光明園)、たしまし例会(七月十四日玉

島中央公民館)、鷺羽川柳会六口島吟行(七月十四日)富柳会一泊紀の川吟行(七月二十日から)、どんぐり句会野崎観音吟行(六月十六日)以上、それぞれ寄せ書を頂戴しました。ありがとう。

▼中島国夫「魔の詩川柳展」は柳樽寺川柳会その他協賛で八月六日から十一日まで銀座ヤマト画廊で開催。

▼昭和四十三年七月一日現在北海道川柳人名鑑が七月十五日札幌市白石町南郷通十二丁目南四九北海道川柳連盟から発行になった。二百円。総数千九百九十五名とあるが、道外の執筆者なども入っているらしい。

▼西尾菜氏(八尾市理事)は七月十七日から三泊四日の旅を能登路へ。家持の妻恋船や春の海―虚子。この句碑のある和倉の加賀屋や時国家、曾々木海岸など感慨深かった由。上時国家にて「大納言の間へ団体では

いる昭和の代」

▼大野風柳氏(新津市)から、「柳都二十周年の大会当日中島生々庵先生の「川柳講座」たくさん頂戴してありがとうございました。とても参考になります。中に私の作品が一句載っていました。昭和二十二年の「川柳祭」の古川ロッパ選の

うまさの敵「シブ」を追放

〈生きた味〉
アサヒビール



中の『白米のおにぎり菓子
のように見え・英雄』がそ
れで、実はこの作品は柳都
を發行する前の作品で、阿
達先生ともまだ逢つておら
なかつた頃、先生も私の作
品とは知らずに当時の新潟
師範学校の入試問題に出さ
れた句でした。この句と古
川柳を二句並べて解釈せよ
というように。二十二年の
秋にお逢いしてその話を聞
き、その句は私の句ですと
いつて驚かれた記憶があり
ます。とてもとてもなつか
しく拝見しました。」

▼竹内聡一・松田宇宙太兩
氏（奈良県）は七月七日の
路郎忌句会に川柳塔岡人の
宮口笛生・村上春巳兩氏と
共に出席され、奈良番傘二
十周年記念大会の本社の協
力の謝意を表わされた。

▼川柳「柳茶屋」六月号は
二十周年記念大会特集号と
して六月二十五日奈良番傘
川柳会から發行された。

▼さいいたま同人「百人句集

」が十周年百号記念に六月
三十日發行された。

遺失品なかの扇子がよく
匂い
——井上 梨花

転地する朝犬を見る犬も
見る
——小池 鯉生

酔うて転がる寂しさを知
るや男の
——篠崎堅太郎

ひとり食う飯に火のつく
ほど乾き
——清水 美江

和解して指に弾ける鳳仙
花
——吉田トヨ子

▼日の丸社友会（鳥取市）
主催の山陰川柳大会は七月
十四日鳥取駅前米吾大会議
室で開催、河村日満氏は、
大西八歩、森田茗人、清水
一保、小西雄々の諸氏は選
者として出席、来会の尼緑
之助、藤井明朗、黒田大鳥
の諸氏と歓談された。

▼暑中見舞を各地から沢山
に頂戴した。
いよいよやをしながら送る
扇風機
——川岡靈眼子

土壇の奥からクラー叱
られる
——植村客遊子

風孕む簾へ仔猫じゃれか

かり
——大塚 千葉

潮騒とぶぐ一匹と雲の峰
——羽原 静歩

▼逸見灯竿氏（岡山市）は
胃潰瘍手術のため入院加療
中であつたが、七月十五日
退院自宅で静養されている
が経過良好の由、速やかな
全快をお祈りしています。

▼並木会（笠岡市）主催の
第二回港まつり句会は八月
四日笠岡市労働福祉会館に
て開催。

▼奴田原紅雨氏（室戸市同
人）から「高知の柳友と会
うたび酒になるのでリウマ
チか神経痛か腰の痛みかが
なかなか除けません。」

▼山田季賛氏（高槻市同人
）は七月十四日夜行で同僚
二名と共に隠岐へ。鯛釣り
島巡りなどを楽しまれた。

▼「船酔の旅は自慢にしてお
れず」七月二十日には工業
学校の同窓会で高野山へ。
帰路和歌山雑賀崎で船釣り
をされ、「三時間の釣り
二時間程は酔い」季賛

▼越智一水氏（今治同人）
は信州路へ旅され、路郎先
生の信州での名句を思いう
かべー湯の花をひとりたの
しむ朝湯かな——と寄信。

▼関戸宗太郎氏（小松市同
人）は、昨年手術をした食
道噴門部の支障で再度七月
二日金沢大学附属病院下部
外科に入院加療中である
と。ご快癒の早からんを祈
ります。

▼江国幽谷氏（岡山県同人
）は一月中旬ころ胃潰瘍の
ため手術するはずのところ
子供らが反対し、灸をすえ
たところグングン快方に向
い昨今はカメラをさげて歩
けるようになりました——と

▼沢田四郎作氏（大阪市、
医博）は民俗学の大家とし
て有名だが、八月六日の毎
日テレビに不二田一三夫氏
が漫才作家として出場され
たのを見て「川柳雑誌」時
代より額が広がったと書
信を寄せられた。このほか
奈良子、弘生、美巳代さん

などからも激励文があつ
た。——ひかえめに語れるな
かに炎見ゆ——奈良子。

▼川岡靈眼子氏（諫早同人
）の長女多加子さん（十九
歳）は山藤順三氏と十月十
三日福岡市で華燭の典を挙
げられる由、おめでとう。

——仲人が議長で市長を頼む
なり——靈眼子。

▼大江秋月氏（兵庫県同人
）は国鉄の文芸年度賞に随
筆二位、川柳三位に入選さ
れた。

などからも激励文があつ
た。——ひかえめに語れるな
かに炎見ゆ——奈良子。

疲れ
肩こり
食欲不振
つかれ目
神経痛に
多々多薬品



アリナミン

本社八月句会

会場 天 性 寺
三日 午後六時

新ホームムグラウンドが上本町近鉄近くの天性寺にきまつた。その第一回句会が、どういうものか、暑さか土地不案内か、とにかく最底の記録をつくってしまつた。まるでホテルといった感じの爽涼さが泣く。

若本多久志氏の柳話は「心理学と川柳」を中心に、自動車の広告など、ご自身の身近な経験を語られた。高価だと良品とおもう大衆心理や、商品名の苦心など堂々三十分間を魅了した。

八月の句会杯はベテラン大坂形水氏が握ぎられた。古豪で氏ほど謙虚に勉強する人はめずらしい。後進の指導も定評があるし、何よりもその人間味かす生みだす佳句には多くのファンを持っている。(河井庸佑整理)

― 八月句会出席者追加・梅志氏・眉水氏 ―
出席 ― 与呂志・古方・葛城・文秋・静歩・一三夫・旅風・万の・笑痴・具吉郎・瓢太・生々庵・滋雀・いさむ・一舟・喜風・庸佑・花梢・恵美子・金三・綾女・鶴声・肖二・貞山・白柳・吸江・天笑・形水・静馬・弓彦・千梢・薫風・季賛・多久志・好郎・小松園・

凡九郎・誓二・舟遊・恒明・弥生・葉子

席題「スタミナ」 神谷凡九郎選

スタミナは酒一杯で足る若さ吸江
案外のスタミナ夏を瘦せている舟遊
スタミナどころか温泉呆けて戻り静馬
スタミナに油いための煙ぶる窓滋雀
スタミナを残してノックダウンされ金三
飯場のスタミナヤカンで酒が出来季賛
スタミナにデンデン虫や蟻も食いと
スタミナも金も勝負に磨り減らし与呂志
ホルモンでスタミナつけてまだ敷一舟
パンとうどんでもスタミナはつく白柳
スタミナをつけてほしいと市場籠いさむ
年甲斐もなくスタミナのつく葉肖二
スタミナを明日へと頼むコップ酒喜風
スタミナはあるが一向もてんのや恒明
夏瘠せにもうスタミナが続かない花梢
広告のスタミナの文字気にかかり旅風
アシカもうスタミナされたような声花梢
体調がスタミナ食で狂い出し旅風
雑草にスタミナおくる陽の恵み一三夫
スタミナを寺の坊主に聞いて来る金三
スタミナだファイトだ定年来てよい好郎
スタミナも付くのかいなと乗る来誓二
ひび割れた仁王にスタミナ満ち溢れ滋雀
その上に何の力が要る葉旅風
ななが効いたのやらスタミナも余し恒明

席題「席順」 小川恒明選

席順にこだわりの無い子等元氣 与呂志

結局は年齢順の席にする形水
ジャンケンで決める席順たよりなし静歩
気が付けば席順寄付の高になり小松園
いつの程にか常連の席順が出来白柳
うるさ方ばかりで席順籤で決め瓢太
耳うちをして席順の変わった会金三
新入社にも席順が決まっていた凡九郎
席順はまんざらでない床柱多志
大器晩成席順などを気にかけず生々庵
席順で揉めて仕上げの膳に居ず小松園
歌も出て席順はつばつ乱れ出し喜風
席順の不満仲居にハッ当たり花梢
席順を無視する大家に気がつかれ一三夫
席順はトップつめたい子に育ち千梢
席順のうっぶんでんやで暗らし好郎
席順を無視して若さはちきれる舟遊
盃を持って席順詫びにくる形明
席順に落ち着きとれず酔つとれず恒明

席題「貝」 橋高薫風選

貝殻も無駄にはしない土産物文秋
腕ずくで開けられ貝は死にました小松園
胸病小に砂地に貝を拾う人金三
黙否権小さな貝を見つめたり静歩
しじみ汁おかげで五分遅刻する多久志
貝を集める趣味を賞めてやり季賛
こんな貝貝でっしゃるか母と子古方
貝持てばお下げの頃が蘇えり滋雀
壺焼きの熱ええ冷酒しみとおり与呂志
貝殻のとじた儘なる不眠従小松園
目をとじてはまぐり死を待つ姿なり生々庵

貝殻ついた石水槽へ買うて来る
人間の欲が育てたアコヤ貝
貝になりたなどとは縁の遠い顔
貝までもグラムで買つてる町に生き
嘘の無い半身見よとあわび貝
蛤の化石が開発を遅らせる
埋立ての噂へ貝も落つかず
はまぐりは華式このかた口にせず
貝ボタンデイトそろそろ終りなり
このボタンアラフら海の貝で出来
酔うてきた手にじゃまくもしじみ貝
まで貝はどうした訳か妙な形
桜貝並べたような素足見せ
色つけた貝は大人のものではな
いただいたさざえに困る台所
天皇の瞳の中の貝となり
真珠抱く貝は素朴な母に似る
やどかりの我がもの顔にくらし
貝のうす生き長らえるむつかし
亡きひと語り合いつつ貝拾う
貝になりたや右にも左にも倦
磯の荒さにさざえの角が育ちゆく

兼題「友情」

児島与呂志選

友情の肩に甘える酒の酔い
披露宴も会費友情ありがたし
友情とは別の話に気が沈み
義理固い友情ちょっと持てあまし
友情におぼれまいと貧に耐え
友情が恋にかわってきた日記
なぐさめている友情が泣いて呉れ

再起する判を友情押してくれ
嫌なこと友情だからあえて言う
友情の言葉はすこし雑となり
一生忘れん友情をそれっきり
悪友になつてアリバイ引き受ける
友情へまたも煮え湯をのまされる
行き過ぎと思う友情の有難し
友情があるからほつておくと
友情のざつぱらんに言える仲
友情は痛いところにふれる
本當の友情妻に誤解され
友情の苦言チクリと胸を刺し
どたん場は友情示す腹はもち
これがほんとの友情だよとすも逃げ
友情は共に不幸を泣いてくれ
友情は笑ってくれただけで済み
こと金になれば友情そっぽ向き
顔色を読んで無言で借してくれ
ずけつと叱つて呉れる友がある
打ちおろす拳友情の限界だ
友情が過ぎてプライバシーまで浸し
定年退職はつきり友情にも区切り
幼ない友情転んだを告げにくる
女あり男の友情真つ二つ
貸してくれなんだばり友情まだ続
ほんまもんの友情悪友がもつて
友情が長い空白埋めてくれ

兼題「人気」

清水白柳選

女学生の人気集めて委員長
タレントを親戚にもち人気もの

行楽の日を人氣もの酷使され
人氣にもかめとうさぎのある芸界
人氣とは逆に師匠は又叱言
よう奢る割に人氣のない男
離婚までしたのに人氣出てくれず
人氣ガタ落ち借金だけ残り
家族一同までお見せする人氣
人氣回復失跡という手をつかい
淡路からのさかな屋ですと言う人氣
人氣とは別にむなしさ抱く孤独
生前の人氣しきびの数となる

旅行・宴会・リクリエーションの
ことならどんなことでもご相談くだ
さい。

楽しい旅行のコンサルタント

イチビシトラベルサービス

本社 東京都大田区蒲田4-40-5

TEL 03 (733) 6951

守口出張所 守口市京阪本通2-18

三洋電機本社食堂内

TEL 06 (991) 1181 内線 588

ちらんぼらんな割に人気がトップ
 奥さんの人気両手にある受話器
 天外のつきあいだけである人気
 見送りにみせた人気はそれっきり
 世話好きで人気あるのに倒産し
 うめばれが付いた人気を追いちらし
 ゼニになる人気でないが満足し
 人気出る頃声帯かれてき
 人気絶頂多少の無理はうなずかせ
 外人に褒められてから出た人気
 人気商売大目に見とく客もあり
 勉強に弱いが女の子に人気
 人気者美人じゃ無いと嫉妬され
 がた落ちの人気大まで吠えてくる
 吾が部下の人気を風呂できいて来る
 人気者来ぬ二次会は座がしらけ
 専門家は首をひねっている人気
 人気歌手バックの力忘れかけ
 人気不動バタバタしないことに定め

兼題「コケシ」 阿万万の選

また一つコケシが増えた旅話
 コケシふと親のない子の顔に似て
 旅馴れた幹事コケシを値踏みする
 言いあてたようにみやげのコケシ
 申訳にコケシに温泉の名書いてあり
 許された試歩へコケシはほつとかれ
 お土産のコケシが窓を芽生えさせ
 お茶にごすみやげコケシ買うときめ
 コケシまたかえて 闊病まだ続き
 良人には言えぬ思い出あるコケシ

天笑 花梢 好郎 多志 一舟 文秋 小松園 恒明 形水 金三 花梢 旅風 静痴 庸佑 恒明 形水 白柳

悪人で無さそうなのがコケシ買入
 入社コケシのように並べられ
 妹へコケシ残して嫁ぎゆく
 よく見ればコケシのお目めみな違い
 忘れた顔によく似たコケシ買入
 売店のコケシも流行着豆こんでる
 閑取の部屋とは見えぬ豆コケシ
 アルサロへ土産の土産置き忘れ
 けつたいなコケシ貰うた旅土産
 そのほか小さいコケシにする土産
 コケシ売娘の丸顔を見くらべる
 子の土産コケシ手頃な値で並び
 世の移りコケシ人形もミニを着け
 可愛がりすぎたコケシの汚れよう
 一対のコケシ女はリボン付け
 2DKコケシの置場もてあまし
 コケシ売東北なまりにある旅情
 大阪駅足らぬ土産にコケシ買入
 母の日をせめてコケシをかざりかえ
 コケシまで昭和の顔になる土産
 故郷のコケシも飾る女子の寮
 何処やらに土のおいのコケシの眼
 コケシ二つ並べば民謡調となり
 山の湯のしめりへコケシの赤がさえ

兼題「窓」 川村好郎選

窓口に半世かけた生字引
 窓みんなあけて団地に嫁が来る
 ささやかな窓新婚の城である
 三十六階窓拭く人もある生活
 旅窓の微風に紫陽花の神秘

旅風 一舟 形水 千梢 小松園 静馬 好郎 好郎 天笑 文秋 笑痴 旅風 綾女 吸江 一三夫 県吉郎 小松園 誓二 凡九郎 生々庵 万の

嬉しい日心のままに窓を開け
 夜明けまで待ちかね養老院の窓
 電車賃残して狙う穴の窓
 発車ベルパントマイムの窓にする
 ひと言が心の窓をあけてくれ
 せめてものうるおい窓辺へ植木鉢
 歯を磨く窓一杯に富士が晴れ
 つばりの窓から飯場の朝が明け
 ビルの窓あけると都会の朝になり
 窓開かぬ旅に子等にある不平
 退院を窓から拍手して送り
 残業の窓へ花火の光る音
 晴れとみて満艦飾の団地窓
 窓同士話し合うてる団地族
 窓のカーテンに若さあり新世帯
 窓開かぬ新幹線のとよりなさ
 裏窓にプライバシーの影うつる
 窓あけて悩みもふつ飛ぶ風を受け
 金網の窓で老母と会う不孝
 早起きを窓で雀がせきたてる
 目さましのように向いの窓があく
 ハコに窓あけて人間住んでいる
 窓口で庶民の声は閉め出され
 窓越しに教えてやっていた子の試験
 ふるりの母も見ている窓の星
 病院の窓からよその子は達者
 会社名また変わってるビルの窓

失名 生々庵 県吉郎 笑痴 天笑 瓢太 笑痴 金遊 舟遊 季賛 吸江 笑痴 吸江 弥生 与志 花梢 花子 月三夫 貞山 花方 古方 滋雀 一三夫 貞山 多志郎 好郎

▼堺・若芽合同川柳句会が十月十三日午後六時から、堺市九間町山ノ口筋・八木摩夫邸宅で開催。題「ひがみ」「手もと」「渡す」

新刊紹介

橘 高 薫 風

丸 十府著

「古川柳—鑑賞から研究へ—」

川傍柳初篇研究でお馴染の丸十府氏の著書が六月三十日東京都千代田区神田淡路町一〇四、愛育出版社から発行になった。定価三百四十円。古川柳の鑑賞には、四季おりおり、人間の一生、詠史川柳などの部があり、研究の部には、古川柳の形態—構成に力を入れて、古川柳の一面の姿を示し、古川柳への道の項では古川柳を志す人の参考になる記事が多くある。一読をお奨めする。

★

川柳「楳元紋太句集」

待望の紋太句集が出た。著者五冊目の句集で、「路郎と金沢の会へ行き、戻りに山中温泉で泊ったのもきのうのようだ。その路郎の『川柳雑誌』が出て、積極的によって、柳界は面目を一新した。」と菊判が流行し、みな月刊にきりかえた大正時代の様子もちよびり視る文もある。自序に次のようにある。「いったい句集を発行するのは、他人に見せるためか。自分が見るためか。句を作るのぜんたい誰のためだろう。人のためか自分のためか、言ったことがあるが、やはり両方のためだろうな、と答えたことがある。狡いようだが本当だ。まあそれ考えずに、なに

げなくそれをするのが普通で、改まって特に考えたことはない。しかし考えてみると、女の化粧と同じところがあると思う。晩にパア—にも出る女性と、堅気な人の留守をまもる奥さんとは違うだろう。富んだ暮らしの女性と貧しい百姓の女とは違うだろう。時と場合、若い者と老婦人とも違う。普通、女が化粧すると男のためだと思う。しかし違う。心を静め、自分の品性を養うためもあり得るのだ。心を爽やかにする。健康のためにもよい。即ち自分のための化粧だ。ひいては周囲のためだ。男を当てにする商売女とは違う、と公然と言いつける女の人もいる。

私はいま、自分の句集が出ようとしているそのとき一冊でも多く売れてくれることを祈る。売れて、元値が取れて誰も損せぬことを願う。売れて売れて仕様がなく、よい句集だ、と言われてみたい気もある。

やはり古くやつている人の句集だと言われたいところもある。つまりいまの場合、売れてくれることを主にしているから、夜はバア—へ出かける娼婦の化粧らしい。そうか、と言われると、なかなか心は複雑で返事に窮するが、浮わすった声で正直に、今のところはそうです、と答えるより仕方がない。皆さん買って下さい。皆さんに勧めて下さい。前後を略したが、こういう名文である。」

釘渡す役で梯子も押さえてる
急ぐには及ばず手相変化なし
何気なく周囲の墓と見くらべる
生きている証拠にたまる領収書

冬の妻今日は不思議に座ってる
マッチ二本勲章ほどに火華する
三等車辛抱をした夜が ажける
神様の店子のように易断所
寡婦ひとりぐらしに国旗愈らず
蛸やき屋動けば車四つまい
どうしても転ぶお供え一つ減し
句は淡々とした味である。

昨秋中島生々庵主幹が、病床を見舞ったあと、「まさに昭和の川柳翁だ。」と述べられた。柳界の人間文化財の著書で、一人でも多くの柳人が鑑かれんことを願ひする。発行所は神戸市長田区重池町一の一七一、三好兵六方ふあうすと川柳社。定価八百円、送料百円。

本社常任理事会

八月三日が句会だったので二日に理事会を開いた。市民文化祭川柳大会の打ち合わせは、まだ資料がそろっていないので九月へ持ち越すことになった。二賞発表が近づいたので各選考委員は多忙の中を懸命である。「選者がテストをされてるみたい」というのは今年も変わらず、作家の目はきびしい。

路郎賞は句数も多いので、ベスト・10へ進出するだけでも大変である。それだけに佳句が期待されるわけである。七時半閉会。出席—生々庵・薫風・庸伯・古方・形水・白柳・一三夫諸氏。

老地樹壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

故 松江梅里追悼句会

金井文秋報

客足が途切れて夫婦にある対話
捨てられたネギの命のいちづな
婚約をしてから花を習い出し
あれだけの小唄いろいろあつた過去
生け花をもってラッシュに迷ひこみ
ぼんぼんは小唄が好きで和服趣味
あるときはあるにまかせている気前
金策のついた頃には女去り
奥さんの気前屑屋も知つてい
応接の花は師匠が活けてくれ
残念ながら女は女房しか知らず
命より酒が好きだと手こずらせ
みせかけの気前選挙が終わるまで
ババ抜きにするタバコ屋よくは
青い目のタレント小唄までこなし
客足のときれとぎれに恋すむ
客足を睨んでバトロソと消え
客足にやがて税関の目がしのび
親の眼にこれは師匠の生けた花
自立して女らしさが消えかかり
新入りへ先輩づらで出す気前
鼻声によつしやよつしやと減る財布

不覚にも描いた女が似すぎてた
命まで取らんが税務署いやなとこ
子はピアノママは小唄の団地族
切りつめたくらしへせて花活ける
目的は小唄にあらざる習いだし
お師匠が持てば枯木も生きてくる
命かきり働かばいて飲んてチヨ
手に扇女はすてに舞うこなし
客足は今日給料日と云う場末
口止めのつもらか課長気前よし
長らえてよかつたといふ妻と老い
玄関へ花を絶やさぬ身だしなみ
日めくりは明日の命を信じ切り
客足へ他人のもうけ計算し
剣山を伏せて生花休みにし
揚け幕へ女に還る一呼吸
四帖半こんな女は変わるもの
女には弱くダイヤも云いなり
役職が付いて小唄を習いかけ
母に生きた女としての日を忘れ
美しき命となる鋭きバラの棘
女ですママの鏡台もういじり
気前よく使つた梅が残る朝
客足のきれ間嬉しい汗を入れ
女手花の向うに遺影かしこまり
ひやかしの客でもほしさいさびれよう
終業ベル女に返るコンパクト
客足は矢張り老舗がものを云い
見くびつて居た客足にあわてだし

古 千 智 野 弓 形 智 千 古
梢 菜 水 彦 葉 千 弓 形 智 千 古
朗 子 菜 水 彦 葉 千 弓 形 智 千 古

あのとときの気前今ごろくつがえし
自己過信して客足に見かざられ
初湯する命戦いもう初め
客足へ税吏帖簿の目をぞらし
集れば女較べの目に交り
客評のけちが孫には良い気前
友の計に己が命をたしかめる
気前よく買うで顔をとおえられ
いい気前さぞ奥さんも出来た人
うれしい事があつて気前よくおごり
餌えてもみこる女の性悲し
内縁の女せつせと貯めたがり
言い勝てば女らしさを疑われ
女形かくし切れない咽喉とけ
気前よく貸してがっちり利子を取り
妬く根も尽きて女は老けにけり
生き抜けと女の辞書は繰り返し

玉造川柳会 (大阪市)

西出一栄報

一つずつ指を数えて数がよめ
オルガンへ素直園児の手がひらく
中ジョッキ時間待ちする旅心
乾杯へちと早すぎた栓を抜き
舌日記ビールに泡に似たる恋
舌打ちをしながら重い尻を上げ
針の糸舌打ちをしながら孫を呼び
商標のように舌打念を押す
舌打ちをくせやと誰も思つて
舌打ちを隠居きつちり聞きがめ
舌が真似てパパの舌打つ音がやめ
なりやかの助手教官の穴をうめ
なんやかと助手雑用に追われ
娘の料理今日はママが助手になり

文 照 文 照 文 照 文 照 文 照
秋 方 三 金 白 弓 龍 金 照 文 照
一 山 一 山 一 山 一 山 一 山 一 山
翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁 翁

年寄りの愚痴が通じぬ自由主義

住込みの店を持つ夢抱いて寝る

ストローが鎖自由へ吠えている

老らくの恋息子に遊んで初な恋

野犬との恋にあわてた血統書

見送りの切れたテープをまだ握り

木洩れ陽を行く反省の道である

反省の歩中丸木の橋渡る

逆流に向き反省の石握る

秘密まであばいて言論自由です

反省へ素直になれぬ鏡閉じ

ある日からある日恋物語り聞く

反省しようこんな壁が白いから

鉄窓の月に反省契うとき

並木道ドラマは愛を告げている

汚れても並木南の方へ伸び

サンドマン斜めに並木道が昏れ

背信の刃正面切っている

邪心なき松を歪める人の性

逃げるのが早い私に武器がない

早く嫁け嫁かしたくない親ごころ

雲流れ流れて城の鬼瓦

瓦屋根昨夜の風を語り合い

迷い鳩らしい並木に思案する

貝殻のうつろいにも似て病める妻

老松は旧家の重味にくねって

公害を恐れて貝のデモつづく

女教師の立場で困るプロポーズ

ちと早いお色気大人が心配し

バラックの子供の夢は瓦屋根

扇水

三林坊

千梁翁

里水

梁二

朝水

旭水

梁水

克枝

里風

八笑人

旭人

千秀

林鶴

承平

簡子

柳子

八笑人

千笑

克枝

三林坊

貴志朗

簡子

梁水

里水

旭水

豐作

鼓水草

扇水

朝承

大阪通信病院川柳会

森下愛論報

鹿を追う子供へ母のあわてよう

飛火野は賑わい鹿も落付けず

スナツプ屋鹿手なづけて客を待ち

鹿のいる途アベック敬遠し

角切りの行車ショームク奈良の秋

古都の寺宗派は別として詣り

歴史の年輪秘めてお寺はそとと建ち

雑草の中に一輪赤い花

失対は涼しいところで草をとり

雑草に薬草もありあなどれず

堺川柳会 (堺市)

和海草春報

開票へ声なき声が物を云い

壁越しにふと聞きはれた淡いのど

宴会の席を湧かした声自慢

街の政治不振がはね返り

近所でも早や合格を知っていた

御近所も買うてくれたとだまされる

うらやましがらせ近所に遠くくれ

割烹衣近所がちやんとやってくれ

大安の折で家中食あたり

ひろいぐひしる乞食の身を案じ

てつちりをくさした方が助かった

集まれば女はやはり同じ愚痴

縄切れを拾い集めてるのが社長

浮動票手の鳴る程は集らず

座を外すには集りが少なすぎ

人集め社長の腰も低くなり

全部課長集め社長だけ喋り

呼鈴に怯え乍らも留守居する

夏路生児

竹荘

晴論

愛食子

没食子

中央

幸男

甘草子

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

子右

南大阪随一の御婚礼家具センター

株式会社 大 一 家 具

阪和線百舌鳥駅前
堺市百舌鳥本町1丁60番地
TEL ② 2716 番

ウィロー社 (ハワイ)

呼びりに犬も油断のない構え
だしぬけのベルで孕んだ娘が戻り
遠慮して押したにベルがきつう鳴り

無駄骨と笑われながら人の世話

無駄話父のご機嫌きいてやり

意見などしては無駄だと匙を投げ

老らくはベントマイナで無駄話

精一杯無駄切りつめても又赤字

わが過去の無駄の多きに悔し

人の世話無駄でなかった今日の幸

お百度も飽くの恋で衰れ無駄

無駄づかいするなど過分のお小遣

道ばたの花も無駄には咲くでなし

無駄のない夫婦というに子が出来ず

安売りにつられてうっかり無駄遣い

夢天遊
白柳

内海

埃女

エロ草

浮草

カイア

紅茶

泉坊

あき

万里

峯水

柳葉

舟

会葬の義理へベチャベチャ無駄話
借金、の枕に暫し無駄話 蒼蛇樓
無駄話相手は課長聴いてやり 快夢記

オーエスケー川柳会 大坂形水報

雨多し車の調子もくるるるる
雨続き干場にかわる2DK
先生の苦手は教育ママの守り
同窓会年輪も忘れてオイおまえ
少年の日の初恋は夢の夢
梅雨明けを知らず遠雷頼もしく
あの女苦手というて今日も会い
少年の夢今はダンブの運転手
もうお産苦手と女房子をあやし
父の死の重さ以上は偉くなれ
洋裁は苦手のままでママとなり

重広 順造 暢一 健児 洋坊 神田 重則 幸太郎 功成 一亜 扇

少年の燃える瞳をぐまかせず
声変わり週刊誌など読み始め
苦手だけ残して一応しまいにし
少年のキャディハバグ重たすぎ

どんぐり川柳会 (大阪市) 川村好郎報

別れきし慕情へ梅の小指噛む
後悔は寝返りを打つ音で知れ
後悔は頭の痛いあいだだけ
飛び込み台降りられもせず後悔し
後悔はするよと母は嫁かす吐
結末が他人と知った日の後悔
後悔はしていませんと妻のうそ
ささやかな飲み代後悔する世帯
手だて尽しても親には悔いがあり
悔ゆる日の夕焼け空が目にしみる

痴吸 雄吉 弥幽 草吉 桂千 步好 馬春 生玄

「雅号ぶっちゃけばなし」 (44)

にちまん



・河村日満・

かわむら

満州に現地入隊という生活の中で
はじめた川柳なので、日本、満州、

支那(いまの中共)を結ぶ、という気持ちからそれぞれの
頭文字をとって「日満子」としました。「親分のな
い馳け出しの名はでかい」という句が示すとおり自分
でつけたものです。ところが短詩をやる人ならそんな
こともあるまいと思っていたのですが、案外「ひま
子」と読まれる場合が多く、昭和三十一年、二年ごろお
もいきて「子」をとってしまいました。

お玉杓子なら尻尾がとれば一人前となるのですが
私の場合はいつまで経っても半人前にもなれず、うろ
うろしながらいまだに模索しているという有様です。

職業 会社員兼鳥取市議会議員 (53歳)

どんぐり川柳会 (羽曳野市) 川村好郎選

はじめさへ小さきはこりすれ違
すれ違ひその一途さをあとで知り
男のはなし知らぬふりコンバクト
四苦八苦鏡もくもるデート前
思ひ出せず会釈返してすれちがい
すれ違ひ船に手を振る海の旅
すれ違ひ振り返る程の顔でなく
居心地を女の顔がきめてくれ
化粧して別のわたしになる鏡
もう一度すれ違ひたい美生児
鏡台が戸惑うような双生児
我が娘慣れた手鏡もう女
この鏡だけが私の素顔知り
すれ違ひ廊下冷たいものと知り
妻の座も忘れじ鏡に向うとき

あすなる川柳会 (大阪市) 川村好郎報

美しく指が曲ったひるの風呂
気苦勞を語せば時代のずれにされ
予報雨新芽の鉢を入れて出る

慶之助 弓彦 素郎 惠美子

後悔をしてたに同じ事でもめ
後悔はしませんと娘惚れてゆき
争った悔が酔うても底にあり
父が懲り僕も後悔するお酒
養老の滝チヨッピリ甜めてみる
愛するのと云わせる勇氣滝の音
那智の滝同じボーズはハネムーン
ハイキング二人の私語滝ののみ
大滝に小心の身を恥じて閉ぢ
滝の音ミサをおぼえし瞳閉ぢ
ルージュ引く心は彼氏と逢うており

水長 鬼遊 喜風 吐来 与太郎 輝成 比呂路 真砂 好郎 章砂

— 62 —

蛙から苦情出そうな面で座し
目が醒めた蛙が初夏を謳歌する
田蛙よあてた俺は百姓だ
誰やらに似て居る蛙構えたり
雨蛙もう起きて来た暖かさ
解剖へ命さきさて来たるひき蛙
政治には疎く田蛙相手ど

○

何時の間か踵が貧乏ゆすりする
もう踵踏まず山頂まのあたり
田舎道踵飛ばしたハイヒール
釘踏んだ踵災難と思えども
かかと上げ棚へとのいた手が嬉し
あかぎれの踵の母へ感謝する
お見合いへ踵のかゆさをであまし
希望なお消えず大地を踏み踵
唄にのり踵をうってジャズ喫茶
疲れてる足の踵へ灸をすえ
娘とタツプ踏める踵を羨やまれ
旅終えて帰る踵の疲れよう
シコを踏み踵へおすもさんの意気
タツプ踏み踵へ場内ドッと湧き
氣に入った靴へ踵が入りかね
魚の目が出来た踵を夜毎掘り
病み上り踵の皮がくるりむけ
サンダルのは半分出す女
踵あげうるさい部屋をそと抜け
初夏の波美人の踵へたわむれる
路んまえたかかとへ男の力が出
ハイヒールかかとが取れた砂利の道
百姓のあかぎれ踵へ感謝する
あかぎれの踵こやく喘ませとく
児の踵みつめて母も歩かせとく
舗道橋母の踵の音が冴え
やわからかになった踵の開病記

美弥子敬香二国由起朗富武志加代キ吉透英鎮也泰長忠志重女久山久勝和征佳山久風

「明治の名古屋に川柳運動の台頭」には、
まる六二Pに、富士野鞍馬、金子吞風、北
村白眼子諸氏の健筆も光りを添える
発行所―名古屋緑区鳴海町文木二七ノ二
名古屋川柳社

— 63 —

日時 9月6日(金) 午後六時

会場 天性寺(てんしょうじ)

市電・市バス停前・上本町四丁目

(両側がガソリンスタンド)

(電話 761・4868番)

兼題 柳話

「気まぐれ」

「ゲーム」

「夕暮れ」

「走る」

川村好郎 傍島静馬 菊田いさむ 黒川紫香 市場没食子 選選選選選

席題 三題 当日発表
会費 二百円

★ 投句だけの方は切手五十円封入
★ 電話での投句はご遠慮ください

川柳塔社川柳忌句会

大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

電話大阪 3985番

10月の兼題 「片前道歴」 「天高し」「フライド」

・ 2 D K ・
★この九月二十三日が柄井川柳の百七十九回忌だが、どのように芽をふいたか? ぼくは九月を反省の月として見る。
★前号はヒドかった。機械にかけるときに活字をたおしたのか、とんでもないところに字があったり、その上に落丁され、製本をやり直しというテイタラクである。一日に発送したが諸方へご迷惑をかけたしまいました。★月末発送に土がついた。これで一つの誇りが消えたことは残念。次号で九三年

になるのに、かえすがえすも残念である。
★もう一つ、記録? が消えたのは「同人特集」のないことである。スペースマヒをなんとかしたかったのである。
★石原青竜刀先生の玉稿を得た。じっくり読んでいた。よかった。
★二賞発表が次号にせまった。一年の成果がここにみえる。
★二か月間、寄席にも行けないうつろしさ。しかしこんなで、充実した生活は初めてで、からだをつぶしても本望である。
(不二田一三夫)

十一月号発表 (9月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

近作柳構 (10句) 西尾 栞 選

課題吟 (各題5句以内)

「本番」 平田実男 選
「スカート」 米虫一乃字 選
「消える」 馬場魚山 選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

十二月号発表 (10月15日締切)

川柳塔 (10句) 中島 生々庵 選

近作柳構 (10句) 西尾 栞 選

課題吟 (各題5句以内)

「美人」 北村三歩 選
「急ぎ足」 黄瀬美秋 選
「運」 小川静観堂 選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

定価 百四十円 (送料六円)

半年分 八百七十円 (送料共)
一年分 千六百八十円 (送料負担)

昭和四十三年八月二十五日印刷
昭和四十三年九月一日発行

大阪府南区鰻谷仲之町二〇番地

編集兼 発行人 中島蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪府南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話大阪・二七一三九五番
振替口座 大阪・三三三六八番

〈朝鮮人蔘〉の効用



二千年以上

の伝統をもつ朝鮮人蔘が

この宇宙時代に

すぐれた薬として欧米でも

再認識されています

「ヒヤク」は

この朝鮮人蔘の

有効成分をそっくり

カプセルにつめた

現代人の薬です



朝鮮人蔘エキス製剤

ヒヤク

45カプセル・90カプセル・300カプセル

カプセル

- 体力を充実させたい方
- 疲れがとれにくい方
- 貧血・冷え症の方
- 老化現象の方
- 胃腸の弱い方



山之内製薬株式会社
東京日本橋本町2-5

あなたの川柳塔のためにあなたのお力ぞえを！

倍加運動にご協力ください

料理も電話も

551

ここがいちばん

TEL (641) 551-2

広東料理・焼餃子

豚饅 蓬萊 焼売

大阪なんば

◆出張販売店◆

なんば高島屋／心齋橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
堂島地下センター・弁天阜頭支店／中之島サン・ストアー

5 mg・25 mg・50 mg

全身倦怠・肩こり・腰痛
関節痛・食欲不振・便秘
胃腸機能の減退・疲れ目

ハイベスト

活性ビタミン複合剤

おとり下さい

高峰秀子

疲労
神経痛は
すぐ



気品あふれる
シルエット……

風格と折り目の正しさで、紳士服の使命を完全に表現、存分にオシャレを楽しめます。その秘密は、東レテترون®の激しい動きにもシワ、型くずれ知らず。いつでも気品あふれるシルエットです。



東レ **テترون** (東レ工業株式会社 100%)
オルテロン
スーツ・スラックス
TETRON 東洋レーヨン株式会社

